

女子美

No.157/2007



佐野 めい 「青と余白の祝日」 162.0×130.5cm 2006年

- 2P 佐野めい 新学長インタビュー
- 4P 新理事長・役職者紹介
- 5P 相模原キャンパスに新ギャラリー
- 6P 女子美スタイル☆最新線
- 6P 女優 賀来 千香子さん 特別講演会
- 8P 笠原恵美子氏講演会「In-Out」
- 10P 学生のデザインがMAYのCD版促用床面広告に
- 11P 卒業生が就職対策講座を開催
- 12P 2006年度 卒業（修了）制作展
- 15P 「S靴店の長グツの裏」
- 16P 芸術学科シンポジウム報告
- 19P シリーズ教養ゼミリポート④ 原 聖ゼミ
- 20P 女子美アートミュージアム展覧会情報
- 21P ある日の出来事のノート 鈴木 綾子さん
- 22P 2007年度新任専任教員紹介
- 23P 退職教員からのメッセージ
- 24P 国立台湾芸術大学と学術協定
- 24P シリーズ 女子美探訪⑥、公募展受賞者紹介

Interview ● ● ● 佐野めい 新学長インタビュー



2007年4月、本学卒業生で洋画家の佐野めい氏が新学長に就任されました。画家として美術界に数々の業績を残しながらも、本学で長らく教鞭をとり、後進の育成にも励まれてきた佐野氏。卒業生で現在絵画学科洋画専攻の講師を務める小野沙織さんと、韓国からの留学生で大学院博士後期課程に在学中の安美子さんが、学長就任にあたってのお気持ちなどをインタビューいたしました。

学生の絵を見るのが私の勉強

小野：学長就任おめでとうございます。就任にあたって何か周りで変わったことはございますか？

佐野：今はみなさん「おめでとう」とか、「大変ですね」とか、「体に気を付けてください」とかおっしゃって、とても気を遣っていたいています。

安：おめでとうございます。私は女子美に入って一番印象に残っているのが、入学式が終わって、美術館でやっていた展覧会を見て、そこで売っている絵はがきの中から2枚を買ったんですけど、それが偶然2枚とも佐野先生の絵でした。それまで佐野先生には会ったことがなかったんですが、一番気に入って。

佐野：まあ、ありがとうございます。

安：そのあとで先生がアトリエにいらっちゃって、批評もしていただきました。私は先生から、一番影響を受けているのは、勇気だと思います。創作は勇気がないとできません。先生に会うだけで勇気がもらえるんです。

佐野：私が勇気をあげているというよりも、一生懸命、真剣にやっている学生はアトリエに入った途端にわかりますからね。全体

を毎日見ていますと、みんなの仕事の濃さがわかるんです。安さんの仕事は、そういう意味では密度が濃いです。人一倍ね。だからいろいろ話し合えるんです。

小野さんの作品は新しい絵画棟で拝見しました。ああいう作品は大学院生の時から？
小野：院1年生の時は別のことをやりました。大学院に入って、何か新しいことをしなくちゃいけないんじゃないかと感じて、いろいろ悩んで悶々としていた時期でした。最近を使う素材に頼った表現ではなくて、キャンパスと絵の具の表現に戻っています。やっぱり私は絵が描くのが好きで、色を作るのが好きで。

佐野：いいですねえ。でも、院生のときはうんと悩むべきですよ。しばらくすると「これだ」という方向が決まってきますから、大学院生は、みんな急に作品が良くなってきます。小野さんの仕事は、これからも可能性がたくさんありますね。あれだけ表現が自由闊達で変化しているわけですから、いつも「え、こうなったの？」と驚かされました。

小野：学部生の作品などはご覧になられますか。

佐野：この8年は大学院の客員教授だったでしょ。なかなか見る機会がなくてね。でも、呼ばれば教室に行っていました。みんなの作品を見るのが私の勉強にもなるんです。みんな情報を持っているし、表現方法も多種多様ですからね。教室にいるのは楽しいです。

「女子美らしさ」を追求する・先輩たちに繋がる

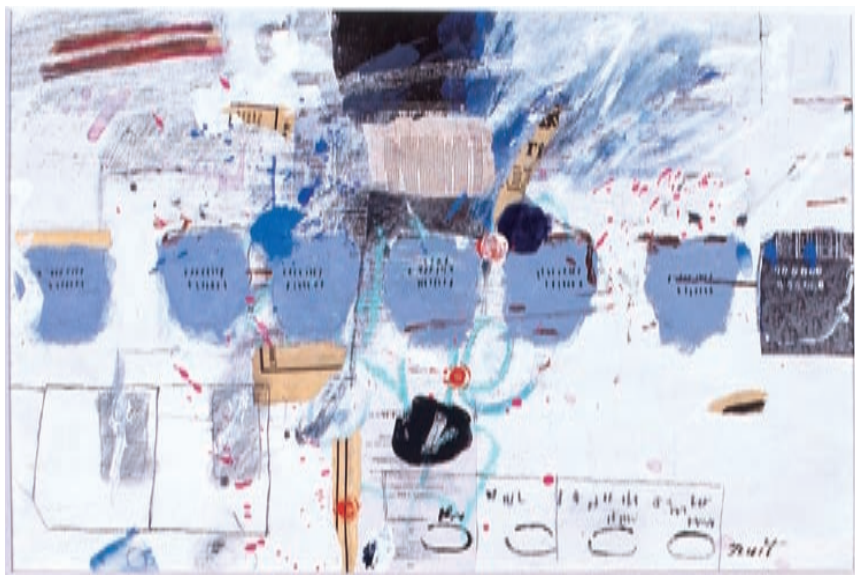
安：先生はこれから女子美のどんな面を伸ばしていきたいと思っていますか。

佐野：女子美らしい女子美のよき伝統、それを受け継ぎながら現在の女子美のあり方を私たちみんなで考え、検討し、そして実行していくことですね。あるアメリカの大学が「面白いことはすべて大学から始まる」と言っています。そうありがたいですね。芸術を志す学生一人ひとりが独自の感性と自由な表現を身につけることによって、社会に関わりながら、人間としても大きく成長していくことでしょ。みなさんが伸びていけば、女子美も伸びていくのです。それぞれの目標に向かっての活躍を夢み、期待しながら1対1の話し合いをするのは楽しみです。そうして、ここから先輩へ繋がっていく人たちが出てくるんじゃないでしょうか。たくさん卒業生が、作家やデザイナー、そして専門の仕事で大いに活躍していってほしいです。

学生に学んでほしいこと

小野：学生にはどんなことを学びとって卒業してもらいたいですか。

佐野：芸術の「美」を追求し続けることですね。自分の思うことをはっきりと表現できるデッサン力を身につければ、それは表面の描写だけでなく、内的なものまで表現できる力となります。ただ「きれい！」とか「かわいい！」だけで終わってしまうものではありません。目にふれる実在を、そ



佐野めい 「ニューヨーク・ドローイング」 32.0×41.0cm 1990年

のまま再現するものでもないのです。新しい実験を試みる、未知のものをいろいろな手法で探る、アトリエではとにかく何にでも好奇心を持って制作を続けてください。失敗する自由もあるし、そこからまた思いがけない発見があったりして面白くなります。挑戦、また挑戦、その気持が大切ですね。そうして、自分が正しいと思うことを自信を持って言える確かな判断力、それを学ぶのが大学です。サン＝テグジュペリの『星の王子様』の中に「大事なものは、目には見えない」という言葉が出てきます。大事なものを心の中に持つことも、ぜひ、大学で見つけてください。

色彩からくる感動が絵画に

安：先生にとって、「絵を描く」とは何かと思いますか？

佐野：何かに感動したときに、その気持を表わそうと思ったら、私の場合は絵を描くということでしょうか。画面の上に感じたことを自由に表すことができるのが色彩です。色彩は人間の心を動かしますし、自分の選ぶ形や色は感覚的なものですから、描く対象はあまり気にしません。で、安さんの場合には、構図の余白の美しさと黒のバランス、いろいろあると思います。でもとにかく心の感動がなきゃ描けませんよね。夢中になって描いたものを誰かがいいと言ってくれば、それで満足ですね。そしてまた、次々制作ができるのです。

生活すること、制作すること

安：先生はこれまで、家庭と制作を両立なさっていらして、そういうところを一番尊敬しています。大変なこともたくさんあったと思いますが、それを乗り越える秘訣は何かありますか。

佐野：大変なことってというのはね、誰にでもいっぱいあります。家庭の場合は、自分というよりも、家族全体を見まわして暮らしているでしょ。だけどいつの間にか自分のことを先に考えて、相手に迷惑をかけた



小野さおりさん(左)と安 美子さん(右)

りしていますね。我が家では、ダイニングとアトリエが続いています。ですから料理を作りながらアトリエの絵も眺められます。こうしようと思い立ったのではなく、何となくいつの間にかそうなってしまっていたのです。お客様に、「こんな油絵の具のにおいのするところで、よく食事ができますね」と言われました。うちでは諦めているのか、感覚が麻痺してしまったのか、もう誰も何も言わなくなりました。私は「どうもすみません」と気にしながら、ダイニングとアトリエをはげしく往き来していました。そのうち、謝る気持ちも頭から消えてしまい、当たり前ようになってしまいました。あとのことは謎です、謎にします。絵もわからないところがあると面白いでしょう。

小野：私は生活をしているということを使い訳に、制作ができない自分を肯定してしまったりするんですけど、先生の話聞いていますと、生活と仕事で忙しいということとはみんな同じことで。

佐野：みんな同じ。忙しいことは全然口実にならないですよ。私も「学長になると忙しいですね、大変ですね。転ばないでください。」と言われますけど、忙しいのが当たり前でやってきましたので多分大丈夫でしょう。でも、さすがに今年パリで開催予定だった個展は延期しました。大学の1年間の行事の流れを見ながら制作を続けてい



佐野ぬい「空間の証明」
162.0×162.0cm 1988年

こうと思っています。あるとき悠悠閑閑の生活をしてみたいと思ったことがあります。ところが私はゆっくり構えたり、のん気に行っていることがなかなかできないのです。映画を観る、音楽を聴く、本を読む、それがまた制作に繋がってしまい、気がつけば絵を描いているのです。つまらないですね、こんなでは。これはきつと強迫観念ですね。でも個展を開いたりすることで、これを描かなきゃだめだ、と縛られるのもいい



佐野ぬい「ジョージタウン・ダイアリー」
116.5×116.5cm 1985年

ですよ。展覧会をやるとか、公募に出すとか、締め切りがあったほうがいいのかもありません。だっていくら描いたって、これでいいっていうのはないですから。

女子美出身の先輩作家たち

佐野：安さんは女子美へきて、一番印象深いのはどんなこと？

安：私にとっては最高の環境でした。周りは公園で自然に恵まれていて。図書館にある資料も良いし。驚いたのは、韓国で一番知られている有名な画家4人が女子美出身なんです。絵を描く人ならその4人のことはみんな知っています。私の出た弘益大学で韓国画を教えていた先生も女子美出身でした。韓国で西洋画を最初に学んだ学生も女子美出身です。1913年に入学した羅蕙錫さんです。

佐野：ああ、羅蕙錫さんですね。やはりそういう方に支えられて伝統を守ってきたんですね。安さんはこれからずっと日本にいらっしゃるの？博士になったらあちらの大学に戻って教えられるの？

安：はい、それが希望です。

佐野：じゃ、韓国に戻って、女子美を紹介して、あなたのように優秀な方を女子美に送って下さいね。ぜひ交流を進めたいですね。

安：弘益大学の学生や先生と女子美の学生や先生と一緒に展覧会をやるとか、そういうこともしたいです。

佐野：ぜひ。みんな一緒にやりましょう。だいたい世界は一つなんて言っているのに現実は全然。芸術だけでも一つにしたいですね。

毎日「自分は絵描きだ」と思うこと

小野：作家を目指す人、続けていく人たちに、メッセージのようなものがありました



佐野ぬい「ル・ソワール・祝祭」
194.0×162.0cm 1998年

らいたきたいのですが。

佐野：毎日、自分は絵描きだと思っていることでしょうか。毎日です。1日たりとも絵のこと、自分のやることを忘れず続けていくといいですね。気は抜けませんよ。それと、健康であること。そうでないと精神にも影響してしまうから。肉体労働に耐える健康体が必要です。そして物事は柔軟な姿勢で考えていくことですね。

小野：学生の中には、「この期間だけしか絵をやらない」という思いで描いている学生も多くて、「現実的に考えると作家として生きていくにはちょっと…」というふうに見える学生たちも多いんです。でも佐野先生が学長になって、作家として生きていく

という姿勢を学生たちに見せることで、みんながもっと自分のやりたいことを描いて、夢を抱きながら制作を続けていければなあと思います。

佐野：そういうふうに思ってくださいとありがたいです。絵描きとしてのことだけでなく、人生には大変なことがいっぱいあります。でも私のようなものでもここまでやってきたということを伝えられれば、みなさんもきっと自信を持つでしょう。

安：自信と希望と勇氣、全部もらいました。

小野：先生と話していると自然に勇氣とか自信を与えてもらえるというか。強い言葉でガンガンと勇氣が必要だって言われるよりも、日常的な会話とか絵を通してそういうことが伝わるのは学生にとってとてもいいことだと思います。

佐野：なんでもあきらめないことですね。「もういい」とか「もうだめだ」と思ってもまた次の日にもう一回考えるんですね。今日はだめでも、次の日まただめでも、また！ってね。そうするといい時がきます。最後にみなさんに言いたいことがあります。大学でいい友、面白い友、生涯の良き友を見つけてください。

安：先生、すごく楽しかったです。貴重なお話がたくさん伺えました。

小野：これからの女子美が楽しみにになりました。本当にありがとうございました。



佐野ぬい (さのぬい)

1932年生まれ
1955年本学芸術学部美術学専攻
1955年より本学芸術学部助手。専任講師、助教授を経て1987年から1994年まで教授。
1994年から1998年まで大学院教授。
1998年から2005年まで大学院客員教授。
現在 女子美術大学名誉教授
【受賞歴】
1955年 女流画家協会展T夫人賞受賞
1965年、66年、68年 新制作展作家賞受賞
1969年 女流画家協会展日航賞受賞
1972年 女流画家協会展協会賞・H婦人賞受賞
1972年、73年 新鋭選抜展優賞受賞
1986年 文化庁優秀作品賞上げ、紺綬褒章受賞
1994年 青森県褒賞文化功労者となる
2001年 青森県文化賞受賞
2003年 第26回損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞
2005年 第58回東奥賞受賞
【美術館収蔵】
東京都現代美術館・神奈川県立近代美術館・青森県立美術館・いわき市立美術館・新潟市美術館・広島市現代美術館・横浜美術館・池田20世紀美術館・上野の森美術館・MOA美術館・佐久市近代美術館・弘前市立博物館・大川美術館・文化庁（国立国際美術館）・女子美術大学・早稲田大学・都立大学・弘前大学・青山学院大学・東京都ほか多数

小野さおり (おのさおり)

1981年 福島県生まれ
2004年 女子美術大学卒業
2006年 同大学院修了
現在 女子美術大学 芸術学部 絵画学科洋画専攻非常勤講師

安美子 (あんみじ)

1962年 韓国 京畿道(水原)生まれ
1988年 弘益大学校 美術大学 西洋画科 卒業
1993年～1994年 東・西洋人古典講座(星泉文化財団) 未来学 修了
2001年～2003年 日本外国語専門学校(東京) 卒業
2003年～2004年 日本大学芸術学部 科目履修
2004年～2006年 女子美術大学大学院美術研究科洋画専攻修士課程 修了
2006年～ 女子美術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程 在学中

NEWS ● ① 新理事長・役職者紹介

平成19年4月1日より学校法人女子美術大学の理事長に大村智氏が就任しました。また、大学院美術研究科長に橋本信氏、芸術学部長に小倉文子氏、短期大学部長に木下道子氏が就任しました。



理事長
大村 智
(おおむら さとし)

昭和10年生まれ。同38年東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了。北里大学薬学部教授を経て平成2年(社)北里研究所理事・所長に就任。平成9年から平成15年女子美術大学理事長に就任、平成15年より同名誉理事長。微生物の生産する357種に及ぶ新規化合物を発見。うち、17種が医薬、動物薬、農薬、生化学研究用試薬などとして世界中で使用されている。それらの数々の業績により米国微生物学会賞、日本学士

院賞、藤原賞、独国ロベルト・コッホ金牌、米国化学会アーネスト・ガンサー賞、国際化学療法学会ハマオ・ウメザワ記念賞など国内外の数多くの賞を受賞している。また、日本学士院、全米科学アカデミー、仏国科学アカデミーなど、国内外7つの科学アカデミーの会員に選出されており、英国王立化学会名誉会員をはじめ、多くの学会の名誉会員にも選ばれている。先の本学の理事長に就任時には、学内の改革を進めると共に創立100周年記念事業を成功させた。



大学院美術研究科長
橋本 信
(はしもと まこと)



芸術学部長
小倉 文子
(おぐら ふみこ)



短期大学部長
木下 道子
(きのした みちこ)

NEWS ● ② 相模原キャンパスに新ギャラリーがオープン

相模原キャンパスに3月に完成した1.5号館（書店・売店棟内）にギャラリーが2つオープンしました。学生たちが企画した様々な展覧会が年間を通して開催される予定です。このオープンに全面的に協力してくださったのは本学卒業生の力石かな子さん、下田倫子さん、石橋あす香さん、野田若菜さん、及川玲奈さんを中心に女子美の学生・卒業生とコラボレートしていくことを目的に立ち上げたユニット「F5+」です。

学生のみなさん、このギャラリーを大いに活用してくださいね。

■パッサージュギャラリー
売店・書店棟のガラスショーウィンドウが発表の空間です。
■書店横2帖ギャラリー
書店棟に併設されたホワイトキューブ型の発表空間です。
＜オープニング企画展＞
F5+project exhibition「Joshibi Super Nova」
vol.1 2007年3月12日(月)～4月20日(金)
Vol.2 2007年4月26日(火)～5月25日(金)
F5+ 移動式フォリプロジェクトURL
<http://www.folly-project.com/index.html>



NEWS ● ③ 無形文化遺産プロジェクトが進行中です

口承伝統、儀式やお祭り、伝統的な音楽、演劇、舞踊、医療、工芸は「無形文化遺産」と呼ばれ、国連教育科学文化機関（ユネスコ）が世界規模でこれらの保存活動にあっています。本学は財ユネスコ・アジア文化センターとの共催で、世界各地の無形文化遺産を分かりやすく社会に広めるためのプロジェクトを立ち上げました。これは2つの活動で構成され、ユネスコ本部

の全面協力を得ています。第一に、本学と本学の学術交流協定大学・友好大学（4カ国）の学生が12～14グループを結成し、無形文化遺産とその保護条約を広報するプロモーション・ビデオ、アニメーション、パンフレット、ポスター等を制作します。制作は2007年4月に世界5カ国で同時スタートし、同年7月に本学に集結して完成を迎えます。優秀作品はユネスコ本部

の広報マテリアルとして採用される予定です。第二に、講演会、シンポジウム、無形文化遺産の実演を本学で開催し、広く一般の方々に公開し理解を深めていただきます。美大生のアート&デザイン力で文化を守るこのプロジェクトは世界的にあまり類を見ないユニークな国際社会貢献活動であり、各方面から強い関心と期待が寄せられています。（国際センター）

NEWS ● ④ ハスクバーナ バイキング賞・マデイラ賞 受賞者紹介

ハスクバーナ バイキング賞受賞者

短期大学部 大崎 綾子

【受賞者コメント】

日本の花といえば桜。その桜の樹をモチーフに取り上げた。

私たちが桜に注目するのは1年のうち花が満開になる春の数週間だけである。しかし、花をつけるまでの1年間の桜の歩みに目をとめてみる。冬の寒さに耐え、枝先のつぼみを膨らませ、春が近づくにつれて大きくなったつぼみはやがて淡い可憐な花を咲かせる。花が満開になると小さな葉が見え、やがて青々と茂る頃には夏がやってくる。秋になると都会の桜の葉は紅葉し、冬の北風が吹くたびに消えてゆく。1本の桜樹を見ていると、人間の寿命をはるかに超えたその存在に力強い生命力を感じる。

この作品は、力強さを表現するために全面を糸でさし埋めることを試みた。樹の後ろの空間は若葉から差し込む光を表している。シルクオーガンジーの重なりの上に、樹皮のパターンをステッチに変換したデジタルデータを、金糸を用いてコンピュータ対応型ミシンで刺繍させた。幹では、古木の重量感を表すためマシンステッチの上にハンドステッチを重ね、縫い方向によって生じる布の縮みを活かした。

古木から毎年芽吹く新しい花や葉の命。この新しく生まれるものを愛おしく思う気持ちと脈々と伝わる古くからの生命の営みを尊ぶ気持ちを込めた作品。いま私達の生きる社会に欠けてしまった「すべての命を大切に。」を考えるきっかけとしたい。

ハスクバーナ バイキング賞について

スウェーデンのハスクバーナ社は300年以上の伝統をもつ製造メーカーです。1872年よりミシンの製造を始め1979年にはハスクバーナ社として初のコン

ピュータミシンを開発し、世界の刺繍作家やマシーンキルト作家に愛用されています。2001年からバイキングソーイング マシンスズ ジャパン社、今年度からは株式会社ジューキ ハスクバーナ事業部より、授業にハスクバーナミシンを使用している本学大学院修士課程美術専攻工芸（刺繍）領域・短期大学部造形学科デザインコース クラフトデザイン系刺繍を対象として、卒業（修了）制作において最優秀作品を制作し、将来専門分野で活躍が期待される学生に賞が授与されています。

マデイラ賞受賞者

短期大学部 柏木 喜代美

【受賞者コメント】

この作品は、今まで制作した古典的な模様を展開した作品などと異なり、広大な「宇宙」をテーマに選びました。あまりに漠然としたテーマのためなかなか形にすることが難しくデザインの段階で大変時間がかかりました。しかし、着物という大きな画面を宇宙に見立てて星雲や流星などで構成することにし、刺繍では点を表現する技法を使い分け、輪郭線の中を平らに繻い埋めるのではないテクニックを学ぶことができました。日本は資源の無い国とよくいわれていますが、日本文化の中の一つの「手仕事」は世界に誇れるものの中かで読んだことがあります。そんな誇れるものに携わることができて幸せです。これからも、ずっと続けていきたいと思えます。

マデイラ賞について

ドイツのマデイラ社は工業用、作家・一般向けの刺繍用糸の製造・販売を行っています。アメリカ・イギリス・日本などに支社があり、業務のほか刺繍やテキスタイル、ファッションを学ぶ学生たちをサポートすることも重視し、毎年イギリスで開催されるマデイラ・ショーは、展示部門に大学や専門学校の学生作品を招待展示しています。2000年のマデイラ・ショーには刺繍コースの学生作品が展示され好評でした。



大崎 綾子 タピストリー「伝えていくもの」
寸法:縦約160cm×横約110cm
素材:ローシルク、シルクオーガンジー、綿芋麻、絹糸、金糸、レーヨン糸



柏木 喜代美 着物「宇宙」
寸法:縦156cm×横130cm
素材:絹地、絹糸、金糸、銀糸

女優 賀来 千香子さん 特別講演会



「女子美スタイル☆最前線」の特別講演会として、本学短期大学を卒業し、現在、女優としてテレビ等でご活躍中の賀来千香子さんをお招きし、女子美在学中のお話やお仕事の苦労話などを短期大学の伊勢克也教授からのインタビューに答える形でお話しいただきました。最後には「どんな場面においても、常に自分自身を大事にし、頑張ってください」と本学の後輩たちへ温かいエールもいただきました。

付属校から短大までの学生時代

伊勢克也（以下伊勢）：賀来さんは、付属の中学から高校を経て、短大を卒業するまでずっと女子美ということですが、学生時代はどんな生徒だったのでしょうか。まずは中学・高校時代についてお聞かせください。

賀来：どの先生もとても優しく、全体に家庭的な雰囲気がある学校でしたから、通うのがとにかく楽しかったですね。ほんわか、ふんわりしてるっていうか、あまりギスギスしたところがなくて。たぶん今も変わらないのではないかと思いますけれど。私は中高とバドミントン部に在籍していました、部長をさせていただいていたこともあって、部活にはかなり熱が入ってましたね。でも、美術の課題も楽しいので、これもしっかりやりたい。ですから当時を振り返ると、美術の課題、勉強、部活と本当によくやっていたなと思います。周りを見て

も、漫画研究会で熱くなる人がいたかと思うと学校に居残って黙々とキャンパスに向かって作品を仕上げている人がいたり、みんながそれぞれ、熱をもって学校に通っているという感じでしたね。

伊勢：高校を卒業して短大へ進学されたということですが、今は学科の名前が変わってしまいましたが工芸的なことを学ぶ生活デザイン教室でしたね。

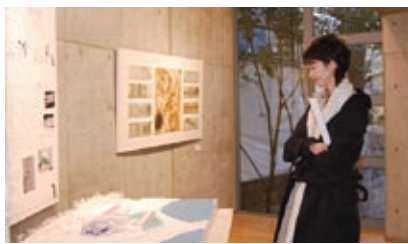
賀来：はい。金属や陶芸、デザイン、木工などですね。

伊勢：つくるといふ行為を通して生活を豊かにしていこうという学科で、選択科目がとて幅広かったと思いますが、賀来さんはそこで何を選択していたのですか。

賀来：金属工芸です。

伊勢：そのころ、すでにモデルの仕事は

じめられていたのですか。
賀来：そうなんです。実は、当時女子美では高校3年で短大の推薦の内定をいただく、アルバイトが解禁になるんですね。わたしもやりたいと思って近所にできたマクドナルドに履歴書を持って面接を受けに行こうかと思ったりしていました。同じころ、モデル事務所にスカウトしていただいて、マクドナルドにわざわざ履歴書をもっていきよりも早いかないかと思、お誘いを受けることにしたのです。親は反対だったのですが、割と安易な考え方で始めました。実際にモデルの仕事を始めたのは付属高校の卒業と同時にです。



伊勢：短大ですと課題もかなり忙しいですよ。両立は大変だったのではないですか。

賀来：はい、大変でした（笑）。1年目は、デザイン、木工、陶器、金工を広く浅くという感じで学び、2年目は選択になるのですが、どちらも短大の先生や助手の方がとても優しく家庭的で、大変だけれど学校が楽しくて仕方なかったですね。仕事の方も少し忙しくなってくると、どうしても課題をためてしまう時期がありました。すると助手の方が心配して、「賀来さん、仕事も忙しいと思うけれど、課題をためていると減点になってしまうから」と言ってくださったのです。それで、がんばらなきゃと思って、ガーっと3日くらい徹夜をしました。そのときのことは今も覚えています。とてもありがたかったなと思ってます。この年齢になりますと、また女子美に通いたいような気持ちがしています。というのは、学生の時は将来の期待とか不安を心に抱きながら、無我夢中でやっていますよね。でも、こうして年齢を重ねてみると、もう少し勉強をしておけばよかったとか、もう一度勉強し直したいとか、そんな思いを抱くようになってきました。

伊勢：今、短大には社会人の入学枠というものもありますので、よろしかったら、僕が推薦状を書きますよ（笑）。実際、50代から上の世代の方で、もう一度トライしてみようという方が短大でもものをつくることに真剣に取り組んでいます。

創造性を女優業で発揮

伊勢：短大を卒業して社会に出られてからは、女優としてのご活躍です。このお仕事も非常に創造性が必要とされ、美術作家などと同じくらい過酷ではないかと察します。女子美で培ったものづくりに対する気構え

女子美スタイル☆最前線

JOSHIBI GRADUATE WORKS 2006

—女子美術大学・女子美術大学短期大学部 卒業制作選抜学外展—

この展覧会は五美大に参加していない学科・コースによる卒業制作選抜学外展で、今年初めて実施したものです。杉田 敦 准教授（芸術学部基礎教養系/美術評論家）がコーディネーターを務め、「女子美の今”女子美の元気”を伝える」というテーマで、2月24～28日の5日間、ヒルサイドフォーラム・プラザ・アネックスA（東京都渋谷区代官山）にて開催しました。期間中、ヒルサイドプラザでは、上記の賀来千香子さんの特別講演会のほか、ファッション造形学科の学生によるファッションショーなども行いました。※公募により選ばれた「女子美スタイル☆最前線」というタイトルは2006年度工芸学科を卒業した増本幸子さんが作成しました。



みたいなものは、仕事の中でどのように生かされているのでしょうか。

賀来: 女子美を卒業したら、やはりデザイン関係や美術関係の道に進むのが本来ではないかと思うのです。にもかかわらず、私は芸能界というか、映画演劇の世界に飛び込んでしまった。そのことについては、どこかで自分は女子美の卒業生のラインではないと、なんとなく負い目を感じていたのは確かです。ところが、こうしてお話をしていると、女優という職業も、結局は女子美の延長線上にあるのではないかという気持ちになってきました。ものづくりも孤独な作業ですが、役作りもそれに似ているところがあります。例えば、なにかの役をいただくと、原作がある場合は、できるだけそれを読んで作品の理解を深めるよう努めます。それから、台本の中で自分がどの役割なのか、全体の中で占める位置について考えます。主役の場合もあれば脇役の場合もありますし、共感できる役もあれば、自分ならあり得ないと思う役もあります。どんな人物も好きにならなければ演じることではできませんから、役の立場になって具体的に想像してみます。どこかに共感できるところはあるはずだろうと思いがら。ときにはその人物の本音を探り、演技で伝えようとすることもあります。とにかく、撮影前から自問自答の連続です。そういう作業が面白くもあり、苦しくもあり、なんですね。

伊勢: ものをつくる、イメージしたものを実在化させる、こうした作業は作品制作に限った話ではなく、役作りも同じなのですね。

賀来: ええ。自分は決して女優が天職だと言えるような性格でもないのですが、おかげさまで芸能生活も20何年を迎えたことを思いますと、やはり不器用ながらも演じることが好きなんです。好きだという気持ちやエネルギーをもってなにかをやるのが、自分を向上させるのかなと思います。

伊勢: 好きであることと、好きなことを続けていくこと。どんな仕事に就くにせよ、それが一番大事な才能ですよ。でも、壁にぶつかったときなどはどうやって乗り越えるのですか。

賀来: 私の場合は、信頼できる先輩や恩師の方なんかにお目にかかって、お話を伺っているうちに気持ちが整理できていくことが多いですね。特に悩んでいるときには、あまりいろいろな人に相談しすぎると、逆に迷ったりしてしまいますから、信頼できる方を絞るようにします。



好きなことを続ける力をどう養うか

伊勢: 大学で教えていますと、毎年何人か優れた学生がいます。その学生が卒業して続けていくことが非常に少ないんですよ。もしも持続するテクニックというものがあるのならば、それを教えてあげたいくらいです。

賀来: やはり続けていくのには、謙虚な気持ちと、柔軟で素直な気持ちが大切な気がします。いつもアンテナを張り巡らせて周囲を観察し、これはと思うことは真似して、流すところは流していく。自分の可能性を信じて向かっていけば、道が繋がっていくのかもしれませんが。もしかしたらその道は最初思っていたものと違うかもしれないけれど、向上したいという気持ちを持ち続けていけば、きっと道は素敵に輝いて、つながっていくんじゃないでしょうか。

伊勢: 閉じてちゃいけないってことですね。ときには耳に痛いこともあるかもしれないけれど、それも謙虚に受け入れると

うか。

賀来: そうですね、閉じちゃうと成長のためのチャンスを逃してしまいますね。私自身も、色んな出会いを新鮮に受けとめていきたいといつも思っています。

伊勢: 女子美は女性だけの美大ですけども、その環境が良い結果を生んでいるのか、他の美大に比べて女子美の卒業生は元気がいいというか、とにかく自由でのびのびしていると言われます。賀来さんは女性だけという女子美の環境についてどんな思いを抱いていますか。

賀来: 私自身は、女子校ということにはまったく違和感ありませんでした。女子美というくらいですから、女子だけで当たり前というか、そういう前提を受け入れたうえで入学しましたからね。異性がない分、みんなのんびりとしていて和気あいあいとしていたし、お互いに変な気を遣わないで、切磋琢磨できたと思います。同級生も先輩後輩も家族みたいな感じでしたから、学校がほんとうに居心地よかったです。社会に出たら、そういう純粋な関係を築くことはなかなかできないですよ。だから、女子美時代というのは、人生の中でもすごく貴重な時期だったと、今になって思ったりします。

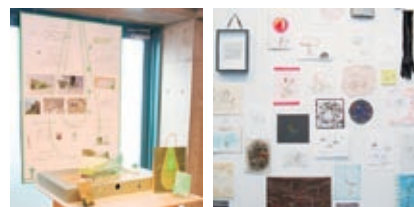
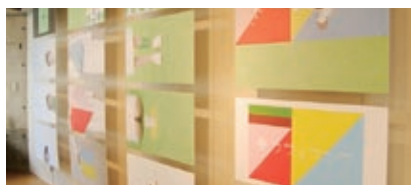


賀来 千香子
(かく ちかこ)

女優
1961年東京都生まれ
女子美術短期大学造形科
生活デザイン教室卒業

<最近の主な出演作品>

- 2003 TBS 「未っ子長男姉三人」
- 2005 映画 「ハルウララ」
- TBS 「涙そうそう〜この愛に生きて」
- 2006 TX 水曜ミステリー「作家・如月洋子の事件ルポ」
- NTV DRAMA COMPLEX「松本清張スペシャル 共犯者」
- TBS 月曜ゴールデン「小児救急カルテいのち110番」
- ANB スペシャルドラマ「氷点」後編
- 映画 「かかしの旅」
- 舞台 「黄昏」



Lecture ● ① 笠原恵実子氏講演会「In-Out」

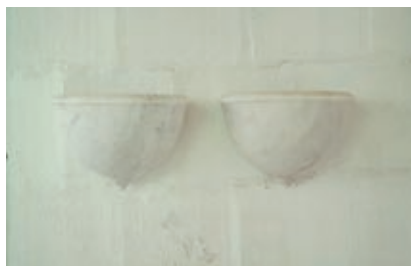
主催：芸術学科研究室
大学院芸術文化専攻

昨年12月1日、ニューヨークを本拠に活躍するアーティスト、笠原恵実子さんによる特別講演がおこなわれました。初期の彫刻作品から、多くの人と関わりながら作りあげるビデオやインスタレーションのプロジェクトまで、現在進行中のプロジェクトも含めて9点を選んで紹介いただきました。笠原さんの作品は、鋭い批判精神と洞察力をもって緻密に組み立てられたコンセプトの上に成り立っており、作品の持つ美しさとコンセプトの精巧さは圧倒的です。ここではその中から5点を紹介します。

In-Out

私が今まで制作した作品を順を追って論理的に見たときに、共通して見えてくるコンセプトに「In-Out」というものがあります。ある時は「In」(凹)の形であったり、「Out」(凸)の形であったり、もしくは「In」と「Out」の間をずれるような形であったりするわけですが、どうもこのコンセプトの間を、思想的にも視覚的にも循環しながら作品が進んでいるような感じがするので、「In」と「Out」の間にある地平のようなもの、これをハイフンで示していますが、この地平に私の作品の重要なテーマがあるのではないかと最近考えています。

Subjectified Object



UNTITLED -Double Sink #1- 1993
大理石 各24×19×19cm

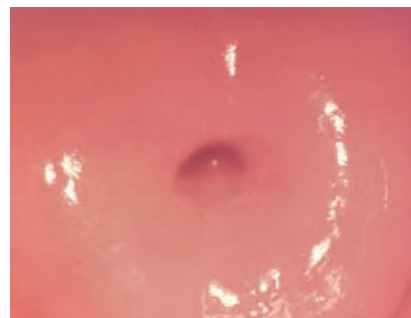
Subjectified Objectとは「主体化された客体」という意味です。フランスに滞在していた頃ルーヴル美術館に頻繁に通いましたが、沢山の大理石の古典彫刻を見ながら退屈した私は、別の視点を与えて美術館の展示室の意味を変えていく遊びに没頭しました。例えば、「ミロのビーナス」を「足2本の像」とか「おっぱい2つの像」といったように体の部位によって記述し、美術作品としての絶対的な価値を剥奪します。そうするとギリシャ彫刻の展示室は「おっぱい10の部屋」とか、「足13本の部屋」と

いった具合にノンセンスな表記になるわけです。その後、さらにそこに居合わせた観客の体の部位も数に入れることにして、美術館の展示内容は流動的に膨らみ、時には「おっぱい60個の部屋」にさえなっていました。そうこうして遊んでいたある日、私はふと自分の体も勘定に入れようかと思いつきました。そしてその時このシリーズのきっかけとなる重大なことに気がつきました。それまでの私は彫刻作品や観客の体を眺めて数を数えていたので、視点は常に前方にあり、体を起こして頭を上げた状態で対象物を見る行為が基本だったわけですが、自分の胸を見ようとした時、私は自分が頭を下げ視点を下にするというそれまでと違った行為をおこない、また、そこに発見される形は他者のそれ(丸い形の乳房中央あたりに乳首の突起がある形)とは全く違ったもの、紡錘形の先端に乳首の突起がある形である事に気がついたのです。これは客体物を見る視点と主体物を見る視点の違い、そしてそこに発見される形態の違いなのですが、この時自分が自分を見る視点を、そのまま客体物として作品にしたら面白いのではないかとひらめき、この作品が生まれました。

美術館と同時にフランス滞在中によく訪れたのが、教会です。入り口付近には大理石でできた聖水桶というものがあり、信者が体を清める聖水が入っています。私の発見した自分の胸の形はこの聖水桶に酷似したものでありました。これはまた通常の流しと同様の形態でもあり、汚いものを洗うための備品と、清らかであるべき聖水を入れるものが似ていることは私の興味をそそりました。キリスト教に登場する二人の女性、セックスをすることなく神の子を生むマリアと、アダムをたぶらかして原罪を人間に与えるエバは「清らかである」と「汚い」ことに二分されていて、現実としての実体がない女性像を形成していますが、こういった清／汚の関係も主体／客体と同様に作品の重要な要素になっています。

『PINK』

『PINK』という作品は160×120cm程の大きな写真作品のシリーズで、女性器における膣と子宮の間にある場所、「子宮口」を医療用カメラで体外から撮影したものです。写真の中で子宮口は大人の頭より若干小さめのサイズに拡大されています。



PINK #2 1996 シバクローム
127×157.5cm

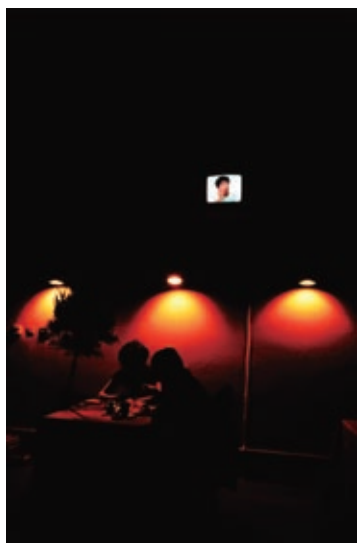
私を含めた総勢25人の女性に婦人科での子宮口癌検診の機会を提供し、その検診中に婦人科の先生が子宮口の撮影を行うことに同意をもらい、その写真をもとに作品を作っています。子宮というと通常人は胎児を連想し生殖機能を語ります。そして膣からは生殖機能以前の性行為を考えセックスを考えます。こういったように生殖の「生」と性行為の「性」は、発音は両方ともSeiですが、全く意味が違います。その二つのSeiの位置的に中間にある子宮口は、二つの相反する意味を合わせ持つ象徴として私の興味の対象となりました。写真は白黒ネガで撮られており、撮影後にコンピュータを使ってすべての写真に同じピンク色を被せてあります。ピンク色から連想されるものには、(特に日本では)桜の花の高貴ではかない美、桃の花の節句などがありますが、と同時に「ピンク産業」に代表される性的なものがあります。こういった相反する二つのイメージ、矛盾を内包したものの象徴がピンク色であり、だからこそ、女性の生殖機能における二分された「生」と「性」を見せる子宮口の写真に後から被されるものである必要がありました。実際の肉のピンク色ではないのです。インスタレーションで作品は通常よりも高い位置に設置され、観客が感覚として「あ、吸い込まれていく」とか「あ、出てくる」といった感じの経験できるようになっています。自分が生まれてきた時の疑似体験を連想してくれたらと思っています。

『SETTING』

SETTINGは、東京都内のアパートの一室に、10代から80代までの様々な年齢の女性を88人招き撮影したビデオ作品です。女性たちには、出かける前に自分の家の鏡の前で使う道具一式、つまり化粧道具、髪を整える道具など、いつも使う道具

をすべて持ってくるようにと、伝えてあります。部屋には椅子、イーゼルにたてられた鏡、小さなテーブルが用意されており、鏡の上方には広角レンズのついたビデオカメラが設置されています。女性たちはこの部屋の中で鏡の前に座り、普段自分の家で行うように化粧をし、髪の毛を梳かし、鏡の上の自分の顔を見つめながら出かける準備を整えます。1時間近くかかる人もいれば、5分ですべて終わってしまう人もいます。髪の毛を梳かすだけの人もいれば、様々なテクニックを駆使してすべてを整える人もいます。明るい色を使ってお化粧する人もいれば、黒だけを使う人もいます。顔、年齢、職業等、どの人も皆違います。しかしながら、誰もが皆自分を見つめながらこういった行為を行うその次元において、個々の差異は大きな意味での同一性に埋もれていきます。ビデオは全部で12時間、88人の女性が次々と現れては消えていくその繰り返して、音声はありません。

モニターに映る彼女たちのイメージは、女性たちが鏡に見る自身のイメージと同じものであり、主体の自身への視線と、作品を見る観客の客体への視線が、この作品の中で一体化します。こういった主体（サブジェクト）と客体（オブジェクト）の併置は私の作品の中に繰り返し現れるテーマであります。またここでは、プライベート（自宅）パブリック（外）という併置がありません。作品のタイトルである「SETTING」とは、まさにこの二つの間を移行していく女性たちの時間を示しています。密かに、でも確実に毎日行われるプライベートとパブリックの間の移行はサブジェクトとオブジェクトの視点の関係同様、「In-Out」のハイフンそのものなのです。



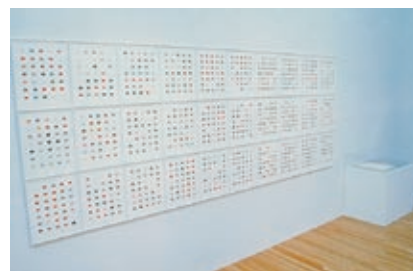
SETTINGポーランド・ワルシャワでの展示風景 (1997-8)

展示方法は様々で、画廊や美術館の中で行うだけでなく、トイレの中や、カフェの中など、実際の生活の中でプライベートとパブリックを示唆し得る場所に積極的に設置しています。こうする事によって、作品のテーマがいかにか日常的であるかを見せられるのではないかと考えています。12時間にも及ぶこの作品は、環境ビデオとでもいうか、それとなく配置し見せる、そういった美意識が合っているとも考えています。

プライベートとパブリックに分かれた現代の生活において、私たちは自分をどう表すかということに気をせざるを得ず、こういった点において、みな同じ政治の中に組み込まれているといえると思います。私たちは皆違います。この差異はかけがえのない貴重な真実ですが、その個人の集積である社会において、個々の差異は大きな政治の中に埋没してしまうという真実も同時に存在します。一人の女性ではなく、たくさん女性の女性たちを撮影し12時間の作品となった背景には、皆が同一のシステムの中にある事を見せたかった私の強い思いがあるからです。

『MANUS-CURE』

この作品は市場で売られているマニキュアを実際に絵の具の様に使っています。ポリエステルフィルムの上に均一に塗られた後、小さなサイズに切り取り規則正しく紙の上に並べてあります。それは一見色の違いによって分けられている色見本帳の様相ですが、実は全部で1050色にもなるこれらのマニキュアはその一つ一つの色につけられた名前順、つまりアルファベットのAからZ順に並んでいます。皆さんが化粧品売場で買物をする時には少数のマニキュアを選ぶわけですが、そこには企業がマーケティングのために知恵を絞ってつけた名前が付けられており、マニキュアという化粧品を購入すると時、付随的に奇妙な資本主義的幻想を購入する事になるのです。大量にマニキュアが羅列されたこの作品は、いわば、美とその幻想にまつわる貪欲な経済の見本帳であります。ここでは唯一絶対の創造性や美は存在しません。唯一の価値が確実に埋もれてしまうような状況、それが今の私たちの社会形態なのです。こういったことを作品として提示したい時に、例えば、ピンクのマニキュアを10色買ってきて作品にしても全く説得力がない。私がこんなに大量のマニキュアをあえて揃えたのは、そのことによってなんともし近づきたい現実があるからです。



MANUS-CURE 展示風景 1998
1050種類のマニキュア、ポリエステルフィルム、ボード、ステンレススチール、シルクプリント
47×37cm

ある状況を語りたかったら、それを切り取る断面をできるだけ大きくする事が必要だと思えます

マニキュアという言葉はマヌスとクレという二つのラテン語から成立しています。マヌスは元来「手」の意味ですが、人間の手が様々な物を創出していく事から次第に「権力」を意味する所となりました。ローマ時代にはマヌスという名前の法律が存在し、婚姻関係にある夫婦間での夫の妻に対する権利が記述されていました。「治癒」を意味するクレと 父権主義的な力を示すマヌスとの合わさった言葉がマニキュアなのです。私はそこに非常に面白みを感じて、『MANUS-CURE』というタイトルにしました。二つの言葉の間のハイフンは、「In」と「Out」の間のハイフンと同じ地平を意味しています。

『OFFERING』

クリスティアニティ（キリスト教）は、世界中に最も広がった制度ではないかと私は思い、非常に興味を持っています。二元論、つまり、イエス／ノーか、白／黒といった思考とその美意識は、クリスティアニティが世界に広がる事によって一般化していったのだと思います。そして、この二元論的思考に様々な疑問点を持っている私はクリスティアニティをたどることでその大きな疑問点を導き出そうと考え、この『OFFERING』というプロジェクトを始めました。

プロジェクトの内容は私が世界中のキリスト教教会を訪れ、そこにあるオフアリングボックス（献金箱）を写真撮影し、またその中から発見される形態を使って彫刻を制作するというものです。そしていわばノンフィクションである写真と、そこから創られたフィクションである彫刻を同時に見せてインスタレーション作品として成立させ、現実とアートの接点を探ろうとしています。



OFFERING 2004 Volkskunde(オーストリア、グラッツ)での展示風景

クリスティアニティにおけるオフリングというコンセプトは、見返りを期待しない献身的奉納を意味します。しかし、こういった高尚な意味性は現実には金銭という最も世俗的な物質で代価されます。理想と現実という二元論的矛盾そのものであるオフリングのその目的のために使われるオフリングボックスは、私にとっていわばクリスティアニティの世界観の象徴物なのです。オフリングボックスは彫像や絵画の用に教会の中で重要なものではないし、隅っこにおいてある通常歴史的価値のない物ですが、私はそれに興味を持って作品を作り出しました。ところで、私たちが物を買う行為もこういったオフリング的世界観と同じだと思います。膨大な金額をかけて作られた広告のそのイメージは明らかに商品そのものからはかけ離れており、その広告を見てお金を払って商品を手に入れる私たちがいったい最終的に何を手にしているのかはきわめて曖昧です。

『SHEER』

現在進行中の一番新しい作品がこの『SHEER』というプロジェクトです。インスタレーションは3000x3000x20000程のドーム状構築物が4つ5つ程空間に存在する物で、観客は中に入る事ができます。イメージとしてはイヌイットの住居群、周囲の雪で覆われた大地に主張しすぎる事なく建てられるイグルーの村落の様なものです。それは限定的機能しか持たない住居ですが、確実に住人を自然から守るシェルターです。こういった控えめな美意識が作品の根底にあります。

ドームはアクリルまたは同様の透明素材でできた180×180×90mm程の片面が女性の乳房の様に隆起している立方体をいくつも組み合わせる事で構築されます。この立方体は肌色のストッキングで覆われており、透ける(SHEER)肌のような壁を構成します。ストッキングは、素足のようなのに素足ではない、といった奇妙なコンセプトの商品です。素肌を見せてはいけないという性的規定に対応すべくつくられた人工の皮膚です。こういった背景も含めてストッキングという素材を、女性の欲望の歴史や近代テクノロジーの発達の象徴として使っています。

ドームの中に入ると、女性の乳房の様に乳首が隆起した形が波形につながっています。この先端にはスピーカー機能がつけられていて、小さなヴォリュームで人の話し声か流されています。その内容とは沢山の人々が「あなたの人生の中で一番喪失感のあったこと」について語ったもので、い

ろいろな言語で録音されています。今の段階で150人くらい集まりましたが、最終的には500人程の話をデータベース化したいと考えています。ロンドンにあるセントポール寺院の最上階につぶやきの壁という場所があります。大きな声で話せないの壁に耳を当てて声が伝達できる様に作られた壁ですが、作品のインスピレーションとなっています。また、エルサレムの嘆きの壁もプロジェクトに大きな影響を与えています。

乳首のサイズは実際の女性のそれと比べると随分と大きい物ですが、乳児と母親におけるプロポーションを成人のサイズに当てはめたものであり、母親の乳首を吸っていたその頃を観客が連想する事を期待しています。壁から聞こえてくる話のほとんどが理解不可能な言語である事を考えると、この作品におけるコミュニケーションとは言語を発する前の乳児が母親の存在を確実に把握しているようなものであり、過去の確かな記憶として私たちの肌の上に残っているものであります。乳首の突起-OUT-とドームの中に入る受容性-IN-は呼応して『IN-OUT』の関係が見えてきます。



笠原 恵美子
(かさはら えみこ)

多摩美術大学彫刻専攻卒、同大学院修士課程修了。在学中より作品を発表、国内だけでなく世界各国で紹介される。カルティエ現代美術財団(1991)、ポーランド美術振興財団(1997)、ニューヨーク美術財団(2003)などから助成を得、その作品は東京都現代美術館、京都国立近代美術館、栃木県立美術館、原美術館、東京ビッグサイト、NYパブリックライブラリー、UCバークレー美術館などに収蔵されている。

NEWS ● ⑤ 学生のデザインがMAYのCD販促用床面広告に

エイベックス・エンタテインメント株式会社・阪和興業株式会社との産学連携事業で、エイベックス所属アーティストMAYさんのプロモーションツールの一つとしてCD販促用床面広告のデザインを行いました。

第1弾は2006年7月に実施し、蛭田裕紀子さん(絵画学科日本画専攻4年)の作品が選ばれました。8月28日(月)～9月10日(日)の2週間、都内を中心に「am/pm」約70店舗で掲示されました。第2弾は2006年12月に実施し、一般募集も行われた中での選考で、青木香奈さん(造形学科デザインコース情報メディア系1年)の作品が選ばれました。1月19日(金)

～2月10日(日)の3週間、都内を中心に全国各地で「am/pm」「新星堂」「TOWER RECORDS」「ワンダーグー」の計約220店舗で掲示されると同時に、1月31日発売のアルバムジャケットにもそのデザインが利用され掲載されています。

一部の学生は授業課題として制作しており、作品やプレゼンテーションの方法を企業に評価されることで、より実践的な就業体験となり、これにより社会のニーズを捉え、どのようにデザイン表現に結び付けていくか貴重な経験を積むことができました。

(研究所長 飯村和道)



am/pmの床に貼られた蛭田裕紀子さんの作品



アルバムジャケットにも使用された青木香奈さんの作品

Topics ● 1 卒業生が就職対策講座を開催

様々なフィールドで専門を生かして活躍する女子美の卒業生たち。自身のキャリアに磨きをかけるだけではなく、自らの経験を生かして後輩たちをバックアップしてくださる卒業生も少なくありません。学生たちにとっては心強い存在です。卒業生の大橋由三子さんはバスキーデザインというデザインユニットでプロダクトデザイナーとして活躍する傍ら、本学のデザイン学科で非常勤講師を務めます。



学生のためにボランティアで講座を開いてくださった大橋先生

「就職活動に向けたスケッチの講習を今年も開講してほしい！」

何人も学生からこんな依頼を受け、大橋先生は昨年に引き続き今年も課外授業として「機器デザインの造形手法とスケッチテクニック講習」を主催してくださった。

1月19・20日の二日間、講師を務めてくださったのは大橋さんと同じデザインユニット、バスキーデザインの羽根田さんとインダストリアルデザイナーの矢田部さん。参加した50人ほどの学生は、就職活

動真っ最中のデザイン学科の学生から絵画学科で「立体制作をするときのスケッチ方法が知りたくて」という学生まで様々だ。

「デジタル表示の目覚まし時計」をテーマに、一日目にはインダストリアルデザイン特有の造形用語や造形を整理立てて考える手法などの解説と、線画スケッチの練習、そして二日目には矢田部さんによる実演と、マーカースケッチの練習という流れだ。

矢田部さんはファイルされたご自身の大量のラフスケッチやレンダリングを持参され、学生に見せてくださった。様々な形、テスト、パターンなど、バリエーションに富んだたくさんのスケッチは同じ一人のデザイナーによって描かれたものとは思えないほど。「頭の中のイメージが同じような形ばかりだったり、自分が『やりたい』と思うデザインしか描けないというのではなく、様々な方向に展開できるようにならないとね。」と話す大橋先生の言葉がリアルに学生に伝わる。

プロダクトデザイナーになるには、製品の完成までのプロセスを知るためにも、まずは一度企業に就職する必要がある。そのために大橋先生がこの講習で徹底してこだわるのは、就職試験や実務で使える「テクニック」を教えること。「デッサンの技術やカッコいいスケッチを描けるようになるための講習ではありません。自分が造りた



学生たちは矢田部さんのファイルのをぞきこむ

い形を人に伝えるテクニックを学ぶためのものです。基本さえ押さえれば誰でもできるようになるんです。」と強調する。「デザイナーは『女性だから女性らしいものしか造れない』ではだめ。男性も美容機器の提案をすることもありますし、女性が男性用髭剃りのデザインもします。」「造形として面白いというものだけじゃだめ。使う人のことや使い方を考え色々なアプローチがでなきゃ。」と、プロ意識を持たせるためのアドバイスも忘れない。

今年には昨年の講習からテーマ選びや学生への指導方法を改良したことで学生にはテクニックを他の機器のデザインへ応用する力が身につく、確実に高い成果があったと大橋先生は話す。たった二日の講習で就職試験に臨む準備ができたという学生もいるのだからその意義は大きい。さらに、プロとしての仕事への姿勢、よいデザインのために、そして後輩たちの将来のために助力を惜しまないスタンスなど、この講習から学生が学びとれるものは山ほどだ。

NEWS ● 6 東高円寺商店街・ニコニコロードマップ制作プロジェクト ～商店街・杉並区役所・女子美による地域密着型マップ作り～



マップ表面



マップ裏面



記し、歴史やイベント等の情報、裏面はお店の声が聞こえるように遊び心を取り入れています。学生は「マップが商店街や地域の情報を(もっと)知ってもらえるきっかけとなり、地域活性化に繋がれば嬉しい。商店街の方々とはふれあう中でコミュニケーションの大切さを実感した。チャンスを下さった商店街の方々に感謝致します。」と語っていました。



※グリーンマップは世界的に進められている街の個性を再発見する地図作りの活動です。
参加学生:芸術学部デザイン学科有志・短期大学部デザインコース有志

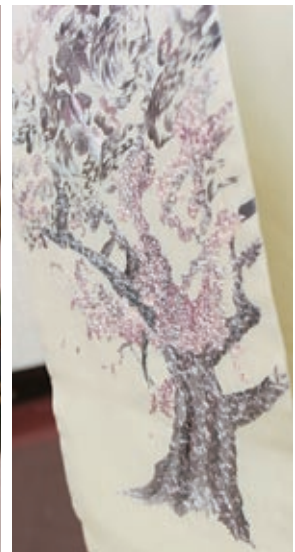
本校からも近い、杉並区東高円寺商店街のマップ制作依頼があり、【ニコニコマッププロジェクト】が発足しました。「親しみやすい地域密着型の商店街を伝える地図作り」をコンセプトに進められ、8月には杉

並第三小学校の生徒さんたちとグリーンマップワークショップ(※)を実施し、商店街の特徴や店主インタビュー、似顔絵描きなどを行い、後のマップ制作の随所に生かされました。マップ表面は地図上に店名を

2006年度 卒業(修了) 制作展

〈杉並キャンパス〉

短期大学部



●平成18年度 卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞 受賞者(短期大学部)

〔卒業制作賞〕

〔造形学科〕美術コース	(絵画)	安藤 宋梨 福永 有希子 坂下 雅美
〔造形学科〕デザインコース	(彫塑)	山崎 夏実 大井 奈津美 尾崎 嶺
・情報メディア系		
・空間インターフェイス系		武田 希美
・クラフトデザイン系		榎本 蓉子 (陶芸・メタル) 岩間 麻衣 (テキスタイル) 扇 直未 (刺繍)

〔修了制作賞〕

〔別科〕現代造形専修	戸澤 樹里
------------	-------

〔優秀作品賞〕

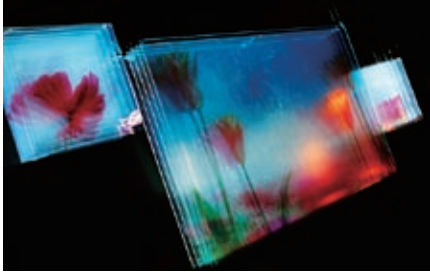
〔造形学科〕美術コース	(絵画)	金上 智美 關 加奈子 諸橋 美代子 中川 里美
〔造形学科〕デザインコース	(彫塑)	石山 鮎美 坂巻 弓華 久我 衣世 大森 彩香 町田 麻紀子 江成 奈那 前川 綾子
・情報メディア系		
・空間インターフェイス系		小久保 亜美 大沼 絵莉子
・クラフトデザイン系		
(テキスタイル)	(刺繍)	

〔専攻科〕造形専攻

・絵画コース	久保田 夏海
・陶芸・メタルコース	小林 由実
・テキスタイルデザインコース	奥寺 翠

〈相模原キャンパス〉

芸術学部・大学院



●平成18年度 卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞 受賞者(芸術学部)

〔卒業制作賞〕

〔絵画学科〕 洋画専攻

松沢 真紀
村田 彩
高島 藍
岩野 雅代
田中 章子
天野 浩子
加藤 友理
川崎 綾
高見 真由子
與田 恵里子
甲斐 なつ美
北原 絵里
二宮 京子
伊藤 綾

〔絵画学科〕 日本画専攻

〔工芸学科〕

〔立体アート学科〕

〔デザイン学科〕

〔メディアアート学科〕

〔ファッション造形学科〕

〔卒業論文賞〕

〔芸術学科〕

石田 真希子

〔優秀作品賞〕

〔絵画学科〕 洋画専攻

井澤 泉
上原 雅美
妹尾 和加子
南須原 奈保子
黒石 千恵子
谷口 智子
芝崎 友美
常盤 美賀
佐藤 菜緒
青葉 梢

〔絵画学科〕 日本画専攻

〔工芸学科〕

〔立体アート学科〕

〔デザイン学科〕

安部 彩枝香
北岡 亜基
春原 瑠子
玉田 友香
角田 紗弥子
藤田 尚子
松本 くみ子
河内 理絵
謝 昭一
鶴岡 有加里
幅谷 仁美
梅津 緑
松本 摩耶

〔メディアアート学科〕

〔ファッション造形学科〕

〔優秀論文賞〕

〔芸術学科〕

内山 慧
小山 沙也香

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

その他の卒業制作展

大学院美術研究科修士課程

- 美術専攻 洋画領域
展覧会名称：女子美術大学大学院洋画2年展
開催期間：1月28日(日)～2月10日(土)
(ギャラリー青羅)
- 美術専攻 版画領域
開催期間：3月19日(月)～3月24日(土)
(銀座東和ギャラリー)
- 美術専攻 日本画領域
展覧会名称：女子美術大学大学院日本画専攻修了制作展
開催期間：2月23日(金)～2月28日(水)
(ギャラリーシビック)
- 美術専攻 工芸ガラス領域
開催期間：2月5日(月)～2月10日(土)
(コバヤシ画廊)

芸術学部

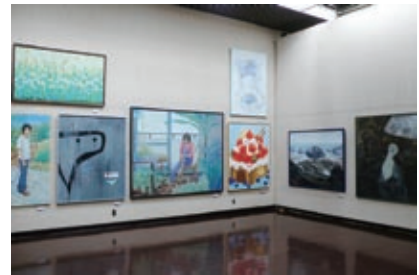
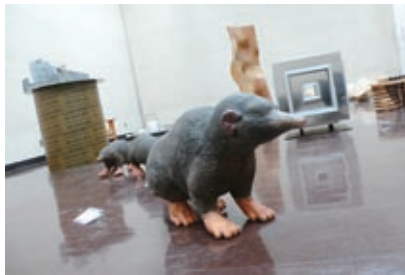
- 絵画学科 洋画専攻 版画コース
開催期間：3月20日(火)～3月25日(日)
(すどう美術館)
- 絵画学科 日本画専攻
開催期間：3月3日(土)～3月6日(火)
展覧会名称：女子美術大学日本画専攻有志学外卒業制作展
(タワーホール船堀1F (江戸川区民ホール))
- 工芸学科 染コース
開催期間：2月10日(土)～2月12日(月)
(TEMPORARY CONTEMPORARY)
- 工芸学科 織コース
開催期間：2月9日(金)～2月11日(日)
(MODAPOLITICA)
- 工芸学科 陶・ガラスコース
開催期間：2月15日(水)～2月19日(日)
(スパイラルガーデン (スパイラル1F))
- デザイン学科 VCDコース
開催期間：3月17日(土)～3月19日(月)
(東京デザインセンター)
- デザイン学科 PDコース
開催期間：3月17日(土)～3月18日(日)
(原宿クエストホール)
- デザイン学科 EDコース
開催期間：3月20日(火)～3月25日(日)
(GALLERY LE DECO (ギャラリアルレデコ))
- ファッション造形学科 A (パターン) クラス
展覧会名称：女子美術大学ファッション造形学科有志ファッションショー「SCENE」
開催期間：2月25日(日)
(原宿クエストホール)
- ファッション造形学科 B (衣装) クラス
展覧会名称：18～ファッション造形衣装クラス卒業制作展～
開催期間：3月3日(土)～3月4日(日)
(ラ・コレツィオーネ)
- ファッション造形学科 造形クラス
展覧会名称：女子美術大学ファッション造形学科有志造形クラス卒業制作展
開催期間：2月20日(火)～2月25日(日)
(GALLERY LE DECO (ギャラリアルレデコ))
- メディアアート学科
展覧会名称：TRYANGLE
開催期間：2月14日(水)～2月19日(月)
(横浜赤レンガ倉庫1号館2階)

短期大学部造形学科

- デザインコース クラフトデザイン系
陶芸・メタルデザイン
展覧会名称：陶芸・金工・漆芸展
開催期間：2月18日(日)～2月24日(土)
(ギャラリー青羅)
- デザインコース クラフトデザイン系
テキスタイルデザイン (+専攻科)
展覧会名称：テキスタイルデザイン卒業制作学外展
開催期間：2月12日(月)～2月18日(日)
(銀座アートホール)

平成18年度 加藤成之記念賞

〈大学院〉	
美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域	平山 愛里
〈芸術学部〉	
絵画学科 洋画専攻	両角 佑子
絵画学科 日本画専攻	翼居 智子
工芸学科	渡邊 史織
立体アート学科	小倉 淳奈
デザイン学科	大重 理美子
メディアアート学科	進藤 真琴
ファッション造形学科	櫻井 愛子
芸術学科	加藤 愛花
〈短期大学部〉	
造形学科	安藤 栄梨
専攻科	青谷 徳子
別科 現代造形専修	八木 美和



平成18年度 福沢一郎賞

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域	内村 鮎
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域	平山 愛里

平成18年度 大久保婦久子賞

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域	三原 奈津子
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 日本画領域	小林 香織
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域	タイダ・ヤシレヴィチ
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 工芸領域(織)	石川 鈴
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 工芸領域(ガラス)	上田 千夏
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 立体芸術領域	清水 園子

平成18年度 女子美術館収蔵作品賞

卒業(修了)制作で優秀な作品を女子美アートミュージアムの所蔵作品とします。

〈大学院〉	
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 立体芸術領域	菅谷 奈緒
〈芸術学部〉	
絵画学科 洋画専攻	両角 佑子
絵画学科 日本画専攻	蛭田 裕紀子
工芸学科	大塚 麻由
立体アート学科	松尾 玲央奈
デザイン学科	水尻 自子
メディアアート学科	熊川 佳子
ファッション造形学科	安田 ひとみ

Report ● 「S靴店の長グツの裏」 企画：NNC (Nothing Nothing Create)

ひとつの展示会を学生がゼロから企画運営する杉田ゼミ（本学芸術学部教養ゼミ）の授業。06年度のゼミ履修生によって開催されたのは「S靴店の長グツの裏」という名の来場者参加型の展示会です。場所は江東区森下にある“のらくろード高橋商店街”。12月10日の開催日に辿り着くまでの道のりや当日の様子をゼミを代表した4名の学生と杉田 敦准教授に伺いました。

展示会のコンセプトは「なにもない」

展示会のコンセプト班は当初、杉田先生から投げられた「社会との関り」というテーマから、漠然としたリアリティのない話し合いを繰り返していたという。そんな中、「きっかけになったのは、誰かの提案で社会一般での“美大生は絵を描いている”というイメージを逆にとり、あえて“何もつくりず”白いキャンバスを並べるのはどうかという話が出たことです」と野尻さんは記憶を辿ります。「でもそれで収まるような話では全くなくて（笑）。そこから、白いキャンバスを置くということは“なにもない状態”と言えるのか、“何かある”のではないかと、と無意味な会話を続けていきました」。しかし、話し合ううちに“なにもない”という言葉が包み隠しているものに皆が目を向け始めました。山崎さんは言

作品の一部紹介

「NNC情報局」一見何も無いような「ちょっとしたさざやかな幸せ」をニュース映像と新聞で伝える●NNCニュース：NNCメンバーや、商店街の人々の間で起きたちょっと嬉しいことをあえて大げさなニュース映像にし、テレビのある店舗で放映する。「孫がチケットを取ってくれて今度初めて飛行機に乗るんです」などの出来事。本物のニュース番組のような仕上がりに立ち止まって観入ってしまう。●NNC新聞：展示会の案内やMAP、ちょっとした嬉しいニュースを活字で来場者へお届け。



「ガチャガチャ NNC」 「なにもない」をテーマに制作した作品を入れたガチャガチャマシーンを設置。マグネットパズル、図鑑、オブジェ、ヘアゴム、レース、万華鏡、絵本、QRコード、巻物、ピースキーホルダー、廃材のおもちゃ、など。先着80名までの限定、無料。

います。「例えば、冷蔵庫に常備してある麦茶や残りご飯だけが中に“ある”としても“なにもない”と言ってしまふ。それは寂しいことです。この“なにもない”という言葉はモノが“ある”状態を知っているからこそ使ってしまう言葉であって、モノに溢れた現代の日本を象徴しているのではないかと、そういう話になっていきました」。そしてこの“なにもない”という感覚の裏側に潜む、贅沢の中のおごり、注意の欠如、満ち溢れている中にある寂しさを問い直すことを目的とする参加型の展示会というコンセプトが徐々に固まりました。

のらくろード高橋商店街で

コンセプトが決まる前から、ギャラリーなどを調べていた会場班。候補のひとつに“のらくろード”があった。岡田さんは言います。「古くからの魅力的なお店が集まる商店街なのに今は人通りもまばら。これはコンセプト案出しのときに出た冷蔵庫の“なにもない”話にも偶然にもつながるのではないかと考えました。沢山の商品が“ある”にも関わらず“なにもない”とされている寂しさがあります。皆、商店街にあるものが見えていないんです」。

“のらくろード”はイベントの実施に積極的な商店街だが、展示会の企画にすぐに賛同してもらえた訳ではありませんでし

「葉屋さん(シャッターアート)」せっかく来たのにシャッターが下り店が閉まっていると「なにもない」と思ってしまふ。シャッターを「なにもない」から「なにかある」へ変えるべくライブパフォーマンスで絵を描く。完成した絵の前で記念撮影する人の姿も。

「JOSENBEL」何も無いけど食べてって「つまらないものですか」何も無いわけでも、つまらないわけでもない。日本人特有の気質、謙虚な気持ち味わう。深川いろはは煎餅店とのコラボレーション。パッケージをデザインしたお煎餅を100枚限定で配る。このお煎餅のおいしさに感動した来場者から後日、深川いろはは煎餅店へお取り寄せの注文が!!

「タカラサガシ」本展示会のメインイベント。来場者が指令書を手がかりに商店街の中、店舗などをめぐる。作品に隠された指令を辿りタカラを目指して商店街をめぐるうちに商店街そのものの魅力を伝える。タカラサガシの出発点が昭和堂靴店の長靴の裏の指令書であることが展示会名の由来。ルートが何パターンがあるため何度も挑戦する子どもが続出。



た。「商店街の理事会に何度か出席してコンセプトの説明をしました。はじめのうちは、『何やりたいのかわかんない』とか、『結局、あなたたちが楽しみたいんでしょ』と言われて…」金田さんは苦笑いしながら話します。「なにもない」というコンセプト自体が商店街を皮肉っているように思えるという厳しい指摘に言い返す言葉が見つからず、そのまま帰った日もありました。

「ただ、最終的にはすごく協力してくださって。『来年もやるんでしょ』って言われましたし、『今度、商店街の幟のデザインをしてほしい』と頼まれたりもしてありますよ」と少し戸惑いがちに杉田先生は語ります。そしてそんな商店街の全面的な協力のもと、総勢21名の杉田ゼミ（通称NNC）主催の展示会は1日で140名以上の動員があり成功のうちに幕を閉じることになりました。（広報課 三木 麻紗子）



左から立体アート学科 金田菜摘子さん(運営班)。メディアアート学科 野尻喜美子さん、芸術学科 山崎絵梨さん(記録班)。立体アート学科 岡田彌子さん(会場班)。展示会の企画運営はコンセプト、運営、広報、記録、会場、の各班に分かれ役割を分担し行われており、同時に各自が作品制作のためのグループにも所属している。



「古着の山」服はそこにあるのに「着る服がない」という言葉とともに「ない」ものにされてしまふ。そんな古着をフリマで買って展示会の資金を稼いだ。しかしそれでもなお売れ残った古着を使い作品を制作。うかばれない古着をうかばせたい!

「買い物しよう」親子で楽しめるワークショップ。商店街のお店ウーピースからの提供の白い袋に自分で飾り付けてオリジナル買い物袋を作る。飾り付けの材料は捨てられる運命にあったものや家に眠っていたもの。子どもたちの斬新なデザイン感覚は女生も唸ります。

NNC(Nothing Nothing Create):杉田ゼミに参加する学生を中心とした任意団体。なしなし創会の意。

のらくろード高橋商店街: “のらくろ”の作者、田河水泡が幼年時代を過ごしたことから改名され、いたるところに“のらくろ”が居る下町の商店街。活性化に積極的に取り組んでいる。

Report ● ②

芸術学科シンポジウム報告

「大地の芸術祭」を通して21世紀のアートの方向性をさぐる



昨年夏に行われた第3回越後妻有アートトリエンナーレ 2006「大地の芸術祭」は、330を超えるアーティストと延べ2,500人のサポーター、そして延べ35万人の来訪者の参加を得て大成功を収めました。本学芸術学科「特定課題研究」では、世界でも例を見ない独自の的方法論によって実現したこの国際美術展において、住民やサポーターがアーティストと協働することの意味、場に則したアートがもたらしたものとは何かを検証するため、来訪者へのアンケート調査を実施しました。

1月20日には、代官山ヒルサイドプラザにおいて調査結果の報告を兼ねたシンポジウムが開催されました。「大地の芸術祭」総合ディレクターの北川フラム芸術学科教授を進行役に、作品制作に参加した方々がパネリストとして出席し、それぞれの立場から、協働の実際、場とアートの関係などについて報告がありました。

※なお、北川フラム教授は、3月、芸術の各分野でこの1年間に優れた業績をあげた人に贈る「第57回芸術選奨」で、この「大地の芸術祭」での芸術振興の功績を認められ、文部科学大臣賞を受賞しました。

■シンポジウム

「21世紀アートの方向と展開」-「大地の芸術祭」での調査結果から

パネリスト

池田 修 (BankART1929代表)
土屋 公雄 (武蔵野美術大学客員教授 / 彫刻家)
古郡 弘 (アーティスト)
高橋 幸次 (日本大学芸術学部教授)
仙石 克己 (本学芸術学部芸術学科教授)
面出 和子 (同教授)
北川 フラム (同教授 / 大地の芸術祭総合ディレクター)

「大地の芸術祭」の波及効果

北川：第3回「大地の芸術祭」は2006年9月7日に閉幕し、その後、さまざまな関連の催しが行われ、検証が進んでいます。海外からもかなり注目されているのが実感としてあります。

重要なのは、街づくりに関して、妻有の

プロジェクトを参考にしようという動きが出てきていることです。神戸や瀬戸内海を囲む市町村、大阪などが美術展を開催して地域の力を取り戻そうとしています。こうした流れにきっかけをあたえたのが「大地の芸術祭」だと思っています。

「大地の芸術祭」では、アートがもっている力が場所の力と一緒にしながら、土地の記憶というものを浮かび上がらせたわけですが、それによって、地域のコミュニティ、あるいは人と人との横のつながりもつくりだされていった。これはまさにアートのコミュニケーション力であり、その効果に関心が寄せられているといってもいいでしょう。今日は、「大地の芸術祭」がどうしてこのようなアートの力を引き出すことができたのか、この美術展のコンセプトや方法論、テーマなどについてざっと展望し、実際に現地で作品制作に関わったパネリストのみなさんから、実際の現場はどうであったのかを報告していただこうと思います。

地域特性から導き出された方法論

北川：まず、越後妻有という地域の歴史や特徴についてお話しします。

ここには人口が3万人以上いる場所としては世界でもっとも雪の深い場所がある。平らな土地はありませんから、一生懸命棚田をつくる。決して効率はよくないのだけれど、その労苦が美しい棚田の風景を生み出した。日本は国策として農業を切り捨てましたが、効率が悪いというだけで切り捨てられていくことに疑問を呈することが、「大地の芸術祭」のそもそもの出発にあります。

もうひとつ、越後妻有では縄文式土器が多数出土しています。なかでも4500年前につくられた火焰型土器などは、非常に装飾性が強く、美しい。こうしたことを当時の人たちは楽しんでやっていたのではないかと。そしてそれを祭祀に使っていた。そのような土との関わり方がやがて、丹精を込めた工芸品に変わっていったのだろうということに思いをめぐらせるうちに、美術の根源みたいなものが見えてきました。それは自然のもつ偶然性と戯れるというか、さまざまな要素が会うことで神話的な力が生み出されるということです。

とはいえ、「大地の芸術祭」は最初からうまくいったわけではありません。アートを通して地域づくりをするということがまったく理解されず、すさまじい地域の反対が

あった中で営まれてきた。よそ者を排除するようなところがありながら、同時に、道と家との間に花を植えて、道行く人を楽しませたい、という旅人に対するホスピタリティもあるのです。そこで、ここをよりどころにして「大地の芸術祭」をやるべきではないかと思い至り、スタートしました。

「大地の芸術祭」はいまだに1カ所で集中的にやってくれという話がある。これはまさに今の価値観ですね、最大の情報に対して最短にアクセスすることが一番良いという。これに対して越後妻有は最も効率の悪いやりかたをとっていいこうと考えました。よそから何かを持ってくるのではなく、ここにとにかく拠点をもつ。長い間生きてきたそれぞれの集落が、それぞれの世界の中心であるということで、中心軸を廃しました。

もうひとつ、美術というのを知識ではなくて、五感でとらえるものだと考えています。たとえば今回ですと観客は150か所近くの場所に動くわけですが、そこで作品が見せるその地域に流れてきた固有の時間、そこに至るまでの旅行、それを大切にしたいと思いました。蒸し暑い、案内が悪い、遠すぎるということを越えて、歩く途中で足からくる土の感触や草のにおいや風を感じていただくということをやろうとした。

これらが「大地の芸術祭」の方法です。つまり、効率を重んじない。中心軸をつくらない。プロセスにおける五感の働きを大切にしよう。離散型でものを考えるということです。

今回の第3回目は、里山の景観の中でも特に空き家、土、植物というものに焦点を当てました。植物、あるいは土というものとそこにあるものと、どのように人間が関わってきたかということを見ていこうというわけです。生け花や陶芸の展示などがその例です。

ここからはパネリストのみなさんにそれぞれが関わったプロジェクトについてお話いただきます。まずは広大な里山を発表の場とした仙石先生からお願いいたします。



北川フラム芸術学科教授(左)と仙石克己同教授(右)

自然の中で気持ちよく働く



《刻の投影-大地から-》
仙石克己+女子美術大学芸術学科学生

仙石：私のゼミの学生、あるいは、今回協力してくれた女子美の学生は、芸術学科の学生です。芸術学科というのは理論を中心としているので、制作に時間をかけることがありません。まず体力、技術に頼るようなことはやめようと。私たちには考えがあるのだから、それを中心にし、なおかつメッセージ性の高い作品をつくろうという検討を重ねました。さらに、制作の条件を検討しました。ひとつは学内で制作ができること。もうひとつは設置の時に現場で制作はせず、設置だけでできあがるものであること。それでつくることを考えました。

学内で部品を全部づくり、トラックで運んでいったのが6月の末から7月はじめにかけてです。現地では地元の方が見学に来てくれたり、ものを持ってきてくれたりと、みなさんに優しくしていただき、気持ちよく働けました。気持ちがよかったということももうひとつありますが、それは周囲の美しい自然です。良い天気、暑かった。ところが風がとても気持ちが良いし、ウグイスは鳴くし、たまたま脇に小川が流れているので、そこをせき止めて水に浸かりながら、あるいは汚れたシャベルを洗いながら作業ができ、自然の中で働くというのはなんて良い気持ちなんだろうかと、みな実感したようです。

出来上がった作品には《時の投影、大地から》と題名を付けました。作品を見て火焰土器をイメージしてくれたボランティアの方たちがおられて、とても嬉しく思いました。全くそういう気持ちでつくったんです。「あ、伝わったな」と皆で手を叩いて喜んだのです。

空き家が学生の手で生まれ変わった

北川：2000年から続けているテーマが「空き家プロジェクト」です。地域の過疎化が進みますと、空き家が増えます。というのは家というのは、壊すだけでもお金がかかるものなので、結局そのまま放置して

いくしかないわけです。ところが、2005年の地震で空き家は大変ひどい状態になってしまった。天井に穴は空く、柱は歪むということで放っておくわけにもいかない。そこでこの空き家を修復して再利用できないかと思い、今回はとくに「空き家プロジェクト」に力を入れました。そのひとつの成果が、日本大学芸術学部彫刻コース有志による《脱皮する家》です。指導した高橋先生、お話をお願いします。

高橋：私が関わった空き家は越後妻有では、いちばん端にある豪雪地帯にある家です。空き家を作品ないしは拠点として使えないだろうかというところから発想し、家を彫るというプロポーズを提示して走り出しました。

完成後は、日舞や版画グループのワークショップ、音楽会、映像ワークショップなどさまざまなイベントを開催しました。

自分たちのプロジェクトを、皆で振り返りつつ考えたのですが、「協働」がキーワードではないかという意見が出ました。アーティストがプランを決定し、プロセスを踏みながらみんなで考えて成立した良い流れ、生成のプロセス、それがこのプロジェクトであるということ。それと、彫刻刀で一皮むくという、彫刻にとって単純ではあるが基本的な手法で行ったことも大きいですね。原点に帰るという感じです。ただ、その時に素人の人たちとの協働との可能性も考えたんですが、これはあまりうまくいかないところがあって、地区の人たちには升を彫ってもらい「マイ升」というのをつくり、出来上がったならそれで乾杯しようということを行いました。家自体に関しては、最初の試し彫りの時には一般の人に参加してもらいましたが、それ以上の参加はできませんでした。というのもやはりモチベーションと、ある程度の技術的な修練と集中力がないと、最終的にあの効果は出なかったらと思うからです。



《脱皮する家》日本大学芸術学部彫刻コース有志

等身大のスケールを体で覚える

北川：同じ空き家プロジェクトということ



高橋幸次氏(左)と土屋公雄氏(右)

で、竹を使った作品で、空き家を再構築した土屋さん、お願いします。

土屋：たしか1998年か99年の冬、松代にワークショップで行った時のことですが、北川さんが印象的なことをおっしゃったのです。「僕はこのプロジェクトを一過性で終わらせたくない。10年続けたいんだ」ということ、「こんな田舎だからこそ、僕は一流のものを持っていきたいんだ」と言われたんです。僕自身、北陸で生まれたので、文化を選べない状況を知っているものですから、非常に共感しました。

今回は学生をひきつけてゼミとして初めて関わりましたが、あくまでも僕自身作家として関わりながら、一緒にその現場に最初から最後までいたかった。ひとつにはクオリティの問題があったからです。僕のゼミの学生は建築科に所属する建築家の卵です。建築家というのは、縮尺の世界でものを考え、模型をつくる。僕は彫刻家ですから、僕の中の例えば1分の1というスケールは僕の中にはなく、それは等身大というスケールになるわけです。そのことを、現場で彼らに身をもって感じてほしかった。

制作中に学生たちは地域の人たちと、まさに共同体の問題も含めて、交流をもちました。それも全て作品をつくる上でのプロセスで、学校では得られない経験です。

私自身も発見がありました。10年前と比べて、ある変化を感じたのです。ひとつには住民の人たちが非常に作品づくりに協力的だったこと。それは単に手助けとかいうことではなくて、彼ら自身が楽しんでいてということに、ある時気が付いたんです。それは98年や99年には考えられ



《松代商店街-竹環プロジェクト》
武蔵野美術大学建築学科土屋スタジオ

なかった。学生たちと話をしたり、作品をつくっているプロセスを見たりすることを、喜び始めているということに気が付きました。学生たちを連れて行って大正解だったし、2000年から続けてきたことで、地域の人たちも自信のようなものを得たのではないかと思います。それが大きな収穫でした。

地域のシンボルをつくるのが制作の鍵となった



《盆景-II》古郡弘

北川：今回のテーマのひとつに土があるとさきほど言いました。古郡さんには、1回目から「大地の芸術祭」に参加していただいているのですが、毎回土をテーマにしながらか部場所が違います。回を重ねるたびに少しずつ内容が変わってきました。

古郡：初めての回に、直接北川さんに手紙を出して「私をこの地で使わなかったら、あまり意味がない」と強引をお願いしたのが始まりでした。

今回の3回目は地震の後だったもんですから、住民の人たちは自分たちの家を直したり、あるいは田んぼを修理したりということで、時間をつくるのが相当難しかったということを感じました。そこで、まずは一軒一軒、家をまわって子供とかおばあさんとか、手伝いをお願いする男性にではなく、まずは話を聞いてくれそうな人たちに説明をしながら、間接的に少しずつ理解と協力を求めていきました。そのうちに、できることをやろうということになり、彼らが個々で参加してくれました。

この作品は深さが4メートル50センチくらいあるので、掘る作業は重機を使い、あとの植木だとか屋根を葺く作業、石を敷く作業などを住民の人たちに頼んで1班20人くらいで2日間連続でやってもらいました。この作品ができた背景には、やはり地震災害体験がある。そういう体験を経た彼らと話し合いをする中で、「じゃあ、もう一度何かこの村にシンボルつくろうじゃないか」というような案が出てきたわけです。シンボルを考えるうちに、村に生えていて、彼らが毎日触れるような木がいいということになり、彼らが「だんごの木」と

呼んでいる木を建物の中心に設置したわけです。

僕は彫刻家として「触る」ということを中心に考えておりますので、何をやるにしてもまずは「触る」ということからはじめたかった。それで、肉体労働を通して理解し合おうと、一緒に作業をしました。

普通の家を、新たな普通の家に再生する

北川：今回、横浜を拠点に、僕らと同じようなスタンスでアート活動を行なうBankARTが、空き家を「BankART妻有」と名付けたセミナーハウスとして展開してくれました。その模様を、代表の池田さんにご紹介いただきます。

池田：現在、僕は横浜の歴史的建造物を使って、あるいは公共施設を使って、アートのスペースをつくっていくんですが、それをきっかけとして街の再生、元気にしていこうというような横浜市が推進しているプロジェクトを主にやっています。



《BankART妻有》みかんぐみ+BankART

《BankART妻有》はみかんぐみの曾我部昌史さんという建築家に全体の改装をお願いしました。コンセプトは、普通の家を普通の家のように改装していきたいということでした。これは作品にしていくプロジェクトなんだろうとは思いますが、彼とはまず住んで、使える場所にしていきたいということを確認し、それを貫くことにしました。今回は夏に開催するということで外にお風呂をつくるということに重点をおきました。大体50人位は泊まれるような場所になってるかと思います。今後は、呼び鈴とか、パジャマとか、家に必要なものをいろいろな作家にデザインしていただき、快適に住める状態にしていきます。3年後の「大地の芸術祭」のときに見せられたら



古郡弘氏(左)と池田修氏(右)

いいなと思っています。

アンケート結果から見えてくる「大地の芸術祭」の行方

北川：最後に面出先生からアンケートの報告をしていただきます。

面出：「大地の芸術祭」会期中には、多くの大学がアンケートを実施していましたが、女子美ではアートと地域という観点で実施しました。結果から見えてくることは、まず、リピーターの数も増え、入場者数も増えていることから、3回目の今回はかなり知名度が上がっていることがわかりました。夏休み中ということもあり、学生グループのほかに家族旅行などレジャーの一環のようなかたちで訪れている人も多かったように思います。「大地の芸術祭」を見て良かったことは、という問いに対して、好きな作品がある、もう一度見たい作品があった、作品を恒久的に見たい、と答える方がたくさんいました。里山とアートのあり方についての質問では、作品と風景が調和していると答えた方が圧倒的でした。改善すべき点は？という問いに関しては、展示エリアが広いという答が圧倒的に多かった。しかし、北川先生のお話からもわかるように、効率的にしない方向を目指していったわけですから、その部分にきちんと反応しているという解釈が成り立つと思われる。

簡単ではありますが、総括しますと、「大地の芸術祭」は来訪者にとってもポジティブに受け止めてもらえているということがわかりました。



面出和子芸術学科教授とアンケート結果パネル展示



北川：ありがとうございました。現代美術の類を観に、相当数の大人が来ているということは、ある意味でものすごい驚きでした。それともうひとつ面白いのは、やっぱりみなさん、今のお話にもあったように、もっと狭いところで数を減らして実施してほしい、というふうに考えるわけですね。しかし、だからといって観客のいうとおりである必要はない。アートと地域、両方をつなぎたいこの熱意というか、愛情をもちながら両方と戦い続けるということが、極めて重要なのだと思います。

Topics ● ② シリーズ教養ゼミレポート④ 原 聖ゼミ

シリーズで教養ゼミをご紹介します第4回は原 聖教授のゼミです。

昨今消滅の危機にさらされていると聞く地域の祭礼行事や民俗芸能。原 聖教授が教養ゼミで日本の民俗芸能や民間信仰をテーマとして取り扱っているのは、これらの消滅の危機を憂いて…といった理由からではおそろくない。純粋に先生自身が民俗文化の魅力の虜になっているのだ。先生のもともとの専門はケルトの文化論。しかし「芸能の谷」と言われる信州の伊那谷で生まれ育った原先生がここ数年主に研究しているのは日本の民俗文化だ。研究室にはケルトの文化論に関する書物のほかに「芸能の谷伊那谷」や「山国の生活誌」など民間芸能や民間伝承に関する本がずらり。今年2月には熊野の神倉神社のお灯まつりに白装束を着て参加したそうである。

ゼミの最初の数週間は先生から日本の民俗についての総論や事例紹介である。2006年度は前期には特に祭りや民間芸能、神楽、門付け芸、絵解き、節談などが、後期には民俗学やフォークロア、民間信仰、講、守護神、石仏、妖怪、民話などが扱われた。その後学生はテーマを決め、休日を



左:小鹿野歌舞伎を観にフィールドトリップ
右:熊野のお灯まつりに参加する原先生

使ってフィールドワークをおこない、報告書の作成と発表の準備を進める。また、休日にはクラスの中から希望者を募ってフィールドトリップに出掛ける。2006年度は小鹿野歌舞伎のほか、熊野の古道歩きや相模七福神巡りへ、2005年度のゼミでは府中市の大国魂神社でおこなわれる「暗闇祭り」や相模原の市立博物館でおこなわれていた石仏の展示を観に行った。

「学生のテーマとしては地元のお祭りを取り上げる学生が多いですね。こちらからも、誰でも知っている有名なお祭りではなく、自分の住んでいる地域のお祭りを調べよう言っています。町会長さんに話を聞きに行ったり、親にインタビューしてみたり。現在の運営体制がどうなっているのかとか、後継者問題で苦労しているとか、いろいろなことが見えてくる。」

後継者問題はどの程度深刻なのだろう。「芸能の多くは保存会ができればきちんと継承されていきます。農村歌舞伎や神楽などは無形文化財として国や市や村から指定されると補助金があります。でも、門付け芸や節談、こういうものは個人から個人へうまく引き継ぎつがれていかない限り、なかなか残りにくい。」

原先生はフィールドワークを重視する。「現場に行く。自分の眼で見る。携わっている人に話を聞く。これが重要ですね。レポートを書くということでもない限り町内会の会長さんから話を聞く機会はないでしょう。」

しかしフィールドワークでは「せっかく来たのだから」と現地の人にあれもこれもと



原先生が手にしているのは武富島の種子取祭をテーマにした学生のレポート

質問しすぎるのはよくないと原先生は話す。

「相手を『そんなことまで聞くなよ』という気分にしてしまう。聞きたかったことの半分も聞ければ十分だと思いますよ。現場に行くこと、話をすること自体が重要です。」

では事前準備が要なのだろうかと思えば、「事前準備はやるに越したことはないけれど、ほどほどでいいんです。どっちにしてもそんなに簡単に完璧な調査なんてできないから。『こういう角度から調べればよかったな。』とか、『ここをもう少し聞いておけばよかったな』とか、思ってからまた足を運ばばいいんですから。」と原先生。要は楽しむことが重要なのだと言わんばかり。

気張らずに好奇心と少しの予備知識だけをもってフィールドワークに出掛ける。そして現地の人とコミュニケーションをとってみる。確かにそのくらい気楽に構えて取り組んだ方が、祭や芸能の魅力を心から堪能できそうである。そんな方法を示しながら、原先生はじわじわと民間芸能ファンを増やし、伝統文化の保存に貢献しているのである。
(広報課 林亜紀子)

NEWS ● ⑦ 新相模原市のシンボルマークを院生がデザイン

本学相模原キャンパスのある相模原市と津久井町・相模湖町は今年3月20日に合併します。この合併にともなうキャッチコピーおよびキャンペーン・ロゴマークの制作を本学大学院博士後期課程に在籍している佐賀一郎さんが手がけました。現在、相模原市・城山町・藤野町の公共施設等各所に、制作したロゴマークが掲示されています。以下、佐賀さんからのコメントです。

ロゴマークの制作は、相模原市役所の方々とミーティングを繰り返しながら、方向性と具体的な内容を詰めていきました。提出したいいくつかのアイデアのうちで、最終的に納品されたのは、合併後の地図と「と

もに築こう 新たな未来」というキャッチコピーを組み合わせたものでした。「まずは、相模原市が合併することを認知してもらいたい」という要望に基づき、合併するという事実を伝えることに的を絞って制作を進行了しました。ロゴへの地図の採用は、相模原市の小中学生が、相模原市の地理を学習していることを相模原市役所の方から教えていただいたことが大きく影響しています。

ロゴマーク、キャッチコピーの制作は、私にとってはほとんど経験のない領域でしたが、相模原市役所の方々の親切な対応もあって、無事納品することができました。非常に貴重な経験をさせていただいたと

思っています。今回のロゴマーク、キャッチコピーの制作は女子美術大学研究所からご紹介していただいた話なのですが女子美術大学が、学生にこのような機会を設けてくれたということが、とても重要なことだと感じています。このような機会を提供していただいたことを感謝しています。



新・相模原市

相模原市 + 津久井町 + 相模湖町 + 城山町 + 藤野町

ともに築こう 新たな未来

J A M ● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

展覧会開催報告 〈JAM〉

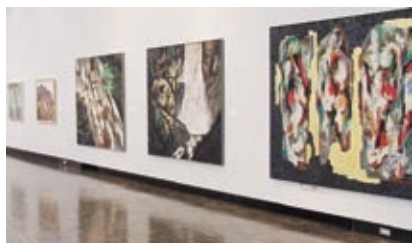
「退職教員記念展」

平成18年度で定年退職を迎える版画の田村文雄教授、日本画の松本俊喬教授お二人による展覧会を開催しました。1月15日の松本教授によるギャラリートークでは、学生時代の作品制作に寄せる思いから卒業後の活動や女子美で教鞭をとりながらの制作についてユーモアを交えてお話いただきました。制作上では構成、画材、技法なども含め「コラージュ」が松本教授のテーマとなっているとお話がありました。

一方、田村教授は本学で30年前に版画専攻を立ち上げた方であるだけに、第1期卒業生から大勢の卒業生が1月20日の田村教授によるギャラリートークに駆けつけ会場は熱気に包まれました。田村教授は「余白」が作品制作の一貫したテーマであり、制作過程では書き溜めたデッサンをコラージュするとのお話でした。

お二人のお話から、共通した作品制作のテーマの「コラージュ」が、版画と日本画という異分野の展示を違和感のない調和の取れた展示にしたのだと再発見しました。

(1月12日～2月5日)



「平成18年度修了制作作品展」

修士課程に新専攻・分野が開設され、今年度修了生は昨年より20名程増加しましたが、限られたJAM展示場のスペースに程よく展示され、刺繍・立体・ヒーリング・メディアアート・ファッションと展示内容の幅が広がり観る人を楽しませてくれました。

3月12日、相模原市立相模台小学校・ひまわり学級の児童18名(引率教員7名)が、「総合的な学習」の授業で来館し、「修了制作作品展」を鑑賞しました。事前には担任の菅原先生から美術館利用についての相談があり、2月下旬には梅田学芸員が小学校で出張授業を実施、3月に来館の運びとなりました。

来館日当日は、展覧会の出品者である修了生がボランティアガイドとして参加し、一緒に作品を鑑賞したり、自分の作品につ

いて説明をしたりするなど、子どもたちをやさしくリードしてくれました。子どもたちにとっては作品を見ることに加えて、修了生とのコミュニケーションも楽しい美術館体験となったようです。

またボランティアとして参加した修了生からは「立体作品の顔に見入っている子がいて驚いた」「自分の作品に対する反応が思ったよりも大きくて嬉しかった」などの声があり、小学生との鑑賞を通して、修了生にもさまざまな発見があったようでした。

「作品」と「鑑賞する人」をつなぐ学生ガイドの試みはまだ始まったばかりですが、JAMでは今後も積極的に取り組んでいきたいと考えています。(3月3日～3月21日)



〈ガレリア ニケ〉 「新収蔵作品展」

平成17年度女子美美術館収蔵作品賞受賞作品による展覧会。(1月11日～2月16日)



「女子美術大学付属高等学校 卒業制作展」

高校3生間の集大成として卒業生全員の卒業制作を展示することにより、それぞれの個性を観ることができました。今後ますますの活躍が期待されます。

(3月3日～3月16日)

展覧会案内

〈JAM〉

「ポスターにできること」

—電通人権ポスターより—



人権の尊重こそが、コミュニケーションの原点であるという考えから、株式会社電通では1988年より人権啓発のためのスローガンを社内で募り、受賞作品を元に人権ポスターを制作する活動が行われています。本展覧会では、1988年から2006年に制作された「電通人権ポスター」を約90点展示し、人権尊重のメッセージを伝えます。(4月5日～5月10日)

「祭りの装束～林 唯一の眼～」

今年7月に本学でユネスコ無形文化遺産支援プロジェクトとして「無形文化遺産の保護に関する条約のプロモーション及び美術大学生による同条約広報コンテンツ制作ワークショップ」が実施されます。



過疎化、急速な少子化、高齢化の進行、生活様式の変化の中で、各地域において守り伝えられてきた様々な伝統文化が消滅の危機にさらされている昨今、本展覧会において地域文化を「世界」と「日本」の双方の視点から見ることで、失われつつある地域文化の保存・継承を啓蒙したいと思います。本館収蔵の林唯一《郷土の芸能》は紙を支持体とした鉛筆・淡彩の作品です。時の流れとともに失われつつある日本各地の伝統芸能を精緻な描写で現代に残しています。舞踊における一瞬の所作をとらえた精密な描画は、絵画としての鑑賞に留まらず、民族・風俗の歴史資料としての価値も併せ持っており、無形文化遺産支援プロジェクトと並行開催することで、アジアを始めとする世界の無形文化遺産と日本国内の伝統芸能への多面的なアプローチが期待されます。

(5月24日～7月23日)

Essay ● ある日の出来事のノート 鈴木 綾子さん (第7回パリ賞受賞者)

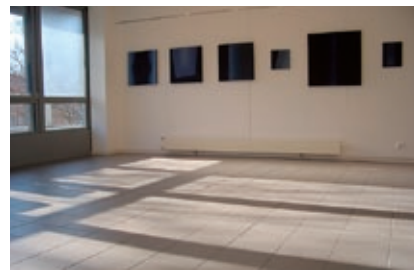
パリにある国際芸術都市に毎年受賞者を
 研究員として派遣する100周年記念大村
 文子基金による「女子美パリ賞」。第7回
 受賞者で1年間パリに滞在していた鈴木綾
 子さんが現地でも感じたことを寄稿してくだ
 さいました。

シテで知り合ったモロッコの絵描きのア
 トリエに出入りしていたときのことであ
 る。ある時彼が、友人宅に差し入れて持っ
 て行くという料理を、キッチンで黙々とこ
 しらせていた。料理の名前は尋ねなかった
 が、沢山のトマトとアリサという自家製の
 練り唐辛子、複数の香辛料を中火で煮込み、
 最後に挽肉を加えるという料理だった。彼
 は何も説明しなかったし、私も何も尋ねず
 に黙ってその様子を眺めていた。そのとき
 の彼のトマトをつぶしながら手際よく鍋に
 加える手さばきや、複数の鮮やかな彩りと
 香りを漂わせるスパイスを鍋底にタブロー
 を拵えるかのごとく見事な配色で加えてい
 く動作や姿勢といった身体の動きが、彼が
 絵画と向き合っている時のそれと全く同じ
 だった。既成の秤ではなく、自身の感覚で
 モノの測量や度合いを定めていく、という
 注意深さと集中がひとつの行動を裏付けて
 いるのである。そういった意識が作品を制
 作するという一つの行為を超えて、日常生
 活の行為にまで及ぶほど、彼の身体の内部
 に深くとどまっているのを目の当たりにし
 たことは驚くべきことだった。そして穏や
 かに立ちのぼるトマトと香辛料の煙に包ま
 れながら、ある時の別の出来事をも考えて

いた。それは知人宅で鍋で炊飯をするため
 に計量の道具を願い出たところ、フランス
 人に何故目分量でわからないのかと問われ、
 計量という道具を失って何も出来ずにいる
 自分がいたことに少々苛立ちを抱いたと
 きのことだ。炊飯の際には計量カップを今
 でも使っているが、計量という道具、つま
 り数という単位を失ったときに、自身の感
 覚でどこまで量を、距離を、時間をはかる
 ことができるのかという危機意識を突如感
 じたのだった。

いつも秤を求めていた私にはそういった
 前提としてあるべき事柄を無視し、自らの
 目で、指で、匂いで感じ、事柄を捉え、分
 析するという作業を欠いていたのである。
 そしてまた、暮らしの中で無意識に行っ
 ている行為と地続きに、制作という行為があ
 るという当然のことを、トマトの煮詰まっ
 ていく音に耳を寄せながら考えていた。挽
 肉が鍋に放り込まれ、塩を振り入れ味を整
 え鍋蓋を閉じたときにモロッコ人の彼はこ
 ういった。「料理をしている時間は僕を故
 郷に帰してくれる」。行為とは過去の経験
 といつも結びついていて、ひとつの行為か
 らいくつもの感覚や記憶を導き引き出すこ
 とが出来た。それはひとつの旅という移動
 の瞬間で、行為の裏側にあるものに少し意
 識を近づけることで、私たちはいつもどこ
 か別の土地や時間に向かうことが出来るの
 だ。私はこの一年のフランスという土地で
 過ごした時間を、またいつどの瞬間で思い
 起こすことになるのだろう。

1年間のパリ滞在という機会をいただき、
 私は生まれて初めて異国の地で生活を営む
 という経験を得ることができました。パリ
 という都市は情報も豊かで、また多くのモ
 ノで溢れかえっていました。こういったパ
 リという都市で体験できた事柄はもちろん
 のこと、なによりも実り多く恵まれていた
 ことは、《cit  internationale des arts》
 というレジデンスに滞在できたことです。
 その名の通り、世界各国からアーティスト
 を迎えていて、滞在者の年齢もジャンルも
 実に様々なこの場所は、お互いに衣食住を
 時折ともにする親しさもありながら、互い
 の仕事の研磨や交換の場もできるという場
 でありました。ここに住む事の出来るな
 よりの楽しみとは、そういった様々な人た
 ちと多くの交流を持てたということでしょう。
 今回のパリ賞で頂いた素晴らしい機会
 を糧に、今後も意欲的に制作活動を行い、
 ひとりのアーティストとして自立してい
 きたいと考えています。この場を借りて、関
 係者の皆様、洋画研究室の皆様、大学院の
 友人たち、そして入江 観先生に心よりお
 礼申し上げます。



2006年 女子美パリ賞受賞 パリ国際芸術都市滞在
 大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画領域2年在籍

NEWS ● 100周年記念大村文子基金 平成18年度 女子美美術奨励賞

女子美美術奨励賞（附属高校・中学校生対象）は本学附属校生徒の美術活動を奨励する賞です。下記の通り、本年度の「附属校生」
 の受賞者が決定しました。



中原 さとみ
 附属高等学校3年



小玉 千咲
 附属高等学校3年



猪野 羽規
 附属中学校3年

100周年記念大村文子基金募集

同窓生・大学院在学生を対象に制作・研究活動の奨励等を目的とした「女子美パリ賞」「女子美 制作・研究奨励賞」を毎年募集してい
 ます。今年度の募集受付期間は、平成19年6月1日(金)~6月30日(出)です。詳細については、本学ウェブサイトをご覧ください。

URL:<http://www.joshibi.ac.jp/society/foundation/>

〔お問い合わせ先〕教育学生支援センター TEL:03-5340-4510/E-mail:ecp-j@joshibi.ac.jp

introduction ● 2007年度 新任専任教員紹介



沢井 史穂
Sawai Shiho

芸術学部 保健体育系 准教授

東京都生まれ。
東京大学大学院教育学研究科体育学専攻博士課程修了。
慶應義塾大学体育研究所助手、東京大学大学院教育学研究科助手、三重県立看護大学助教授を経て現在に至る。専門は運動生理学、バイオメカニクス。主な著書「健康スポーツのすすめ」「エアロビックダンスエクササイズの実技指導」「高齢者向け運動指導」

スポーツ・身体運動の世界はサイエンスであり、アートであるといえるでしょう。一流選手のすばらしい動き(パフォーマンス)は科学的なトレーニングの成果であり、他の誰にも真似できない芸術作品でもあります。人の身体は、与えられた環境に適応するように変化していく、まさに“生きた作品”なのです。スポーツ活動を通じて自分の身体を知り、潜在能力を引き出し、適切な運動刺激を与えることで身体を造り替えていきましょう。



清水 美三子
Shimizu Misako

芸術学部 絵画学科洋画専攻 准教授

東京都生まれ
1988女子美術大学絵画科洋画専攻(版画)卒業
1992日本版画協会賞
1993春陽会賞、安田火災美術財団奨励賞展 新作優秀賞
1994現代日本美術展 神奈川県立近代美術館賞
1997国際版画展—Sightlines—招待出品(カナダ)
2005現代版画の潮流展 町田市立国際版画美術館、松本市美術館 個展
国内を中心に60回開催

版画は、版を通じた間接表現です。“版”という素材と対話しながら、普遍的かつ新たな版表現、現代社会の美術を共に考えていきたいと思っています。

各自の美意識や可能性を存分に引き出し、深めていって下さい。工房で、作品を生み出す喜びを感じましょう。女子美の伸びやかな環境の中で、皆さんの瑞々しい個性が花開くよう、後押しが出来たらと思っています。



出淵 亮一郎
Debuchi Ryoichiro

芸術学部 メディアアート学科 准教授

経歴・研究業績等
1958 鳥取県生まれ。
1983 九州芸術工科大学(現在は九州大学へ統合)卒業。
アスキー株式会社を経て、1986 ハイテックラボジャパン入社。
1989 NHK「驚異の小宇宙・人体」でCG部分担当。
1995 KIRIN Plaza 大阪で個展。
1995 株式会社アトム入社。
2005 女子美術大学大学院非常勤講師。
賞歴等：
ACM/SIGGRAPH Electronic Theatre 入選上映(1991/1994)。
図形情報処理センター 日本CGグランプリ賞受賞(1993)。
KIRIN Contemporary Award '94 最優秀作品賞受賞(1994)。
DCAJ 次世代デジタルコンテンツ制作支援事業採択(2002)。

メディアアートは新しい分野ですが、アートはいつの時代でもその時々最先端の技術とかがわっていたといえます。

授業を通して作品のみではなく、自分自身、社会、そして、未来も、私たちが想像するように形作られることを待っている素材であるということを感じて欲しいと思っています。

また、私自身、皆さんといっしょに学んでいくことにより、自身の研究や作品制作に活かしていければと楽しみにしています。



船盛 修
Funamori Osamu

芸術学部 教職課程 教授

学歴 東京学芸大学大学院修了(教育学修士)
職歴 東京学芸大学附属校教諭勤務の後、関東短期大学(専任講師、助教授)と福岡教育大学(教授)を経て本年4月より本学(教授)着任

教職に就きたい、教員免許状は得たいと考えている学生に対し、美術科教師の職務とその魅力についてじっくりと考えることを何よりも大切にして、「暖め続ける」ことを心がけて行きたい。教育における「美術」教育の役割と可能性の大きさについて「確かな見解」が持てるように導きたい。



南島 宏
Minamishima Hiroshi

芸術学部 芸術学科 教授

1957年長野県生まれ。筑波大学芸術専門学群芸術学専攻卒業。インドを放浪。カルティエ現代美術財団(パリ)に留学。国際美術評論家連盟理事(本部/パリ)を歴任。これまでに5館の美術館を立ち上げる。現在、全国美術館会議理事、美術評論家連盟常任委員、熊本市現代美術館長。プラハ国際現代美術トリエンナーレ2008(プラハ国立美術館)国際キュレーター。著書に評論集「豚と福音」(七賢出版)、近刊予定に「プラトンの洞窟」(文芸社)、「反近代の逆襲」(新宿書房)などがある。

芸術学科でアートコミュニケーション論等を担当します。これまで美術評論家として執筆活動を、そしてキュレーターとして建築デザインも含め5つの美術館の設立と、さまざまな美術展のキュレーションを行って来ました。その経験をもとに、世界のアート界と直結した研究環境を学生諸君に提供できる芸術研究センターの設立を夢見ています。趣味は登山と自転車ツーリングです。どうぞよろしくお願ひします。

©H.P.I.

Message ● ● ● 退職教員からのメッセージ



石田 良恵

芸術学部 保健体育系 教授

体育大学で陸上研究室の助手をしていた私が女子美に就職しました。当時、体育研究室は杉並校舎の3号館地下に在りました。学内を案内してくれる小島先生にテニスコートを見ながら「グラウンドはどこですか」と聞いたのを覚えています。テニスコートを指して「ここです」。初めてグラウンドが無いことを

知りました。女子美にも美術にも無知そのもので女子美を選んで34年。でもその女子美は大当り、自由があり個性的な学生達、先生、仲間に恵まれ最高の職場でした。今度、生まれたら女子美の学生までして女子美の教授になるつもりです。感謝です。



齊藤 経生

芸術学部 芸術学科 教授

中学校の頃、山岳部に所属して山登りの醍醐味を知り、修学旅行の奈良の魅力に強烈な印象を受けた。また英語に夢中になり“文通”を通して諸外国の友人を得、外交官を夢見たのもこの頃であった。長じて大学受験、外国を選ぶか、奈良をとるか、入学手続き直前まで迷い、究極の選択、結局奈良を取り美

術史の道を選択した。以来四十有余年、女子美専任教員に奉職して二十有余年、大学教育の現場は大きく変わり、また変わろうとしている。

小生これからは晴耕雨読、美術史を趣味として楽しい研究が続けたいと考えています。



田村 文雄

芸術学部 絵画学科洋画専攻

本当に長い間、いろいろな思い出とともに女子美で過ごしました。思えば女子美での版画担当と私の版画創作の始まりは同時進行でした。充実して女子美で育てて頂いたと思っております。

美術大学の中で版画教育はずっと洋画の片隅でしか行われていませんでした。どこよりも先に女子美

術大学の中で版画科として表舞台に登場できて、以来30年余りにわたって携わってこれたことを感謝しております。多くの教職員の皆さんに支えられたことにつきると思っています。女子美らしくこれからも誇り高く発展されることを期待しています。



為ヶ谷 秀一

芸術学部 メディアアート学科 教授

女子美にメディアアート学科が新設された事により、私に学生の皆さんや先生方との出会いをもたらしてくれました。卒業した皆さんの一人ひとりの活躍を「誰かに伝えたいニュース」として、周りの人々に伝えることの出来る喜びを日々感じています。

どんどんニュースを発信させて下さい。社会で仕事を続けることで勉強し、学校で優れた先生方に教えられ、学生の皆さんとの生き生きとした交流により、これからも自らの経験を積み重ねて行きます。ありがとうございました。



永井 順國

芸術学部 教職課程 教授

新聞社の論説委員から女子美の教員に転じて足掛け9年、端的に言って手ごたえのあるセカンド・ライフでした。それは、不特定多数の「見えない読者」との間接話法から、特定少数の「生身の学生」との直接話法を楽しめる環境に変わったためだと、勝手に解釈しています。

私語が極めて少ない大学であったことも、大きな

驚きであり喜びでもありました。学ぶことの意味を知っている学生が多かったからだ、これまた勝手に解釈しています。

「不易と流行」のバランスの下、新しい風を世界に発信する女子美であり続けてほしい。そう願っています。



松本 俊喬

芸術学部 絵画学科日本画専攻 教授

1985年、女子美の日本画専攻で教えることになって、22年が経ちました。長いようですが、あっという間だったようにも思われます。大学は、相模原キャンパスへの移転、大学院設置等々、大きく変化してきた時でもあります。その間、私も一生懸命でしたが、多くは教職員の方々、そして学生さん達に

支えられ、そのあたたかさに、とても感謝しています。ありがとうございました。これからも女子美は、発展の為の変化をつづけてゆくことでしょう。魅力ある学生達の、素晴らしい旅立ちの場となるよう、心から祈っています。

News ● 9 国立台湾芸術大学と学術協定

2006年12月8日、本学は台湾の国立台湾芸術大学（以下、台湾芸大）との間で学術交流協定を締結しました。台湾芸大は1955年に台湾で最初の芸術学校として開校しました。現在は学士・修士・博士課程に4700名の学生が在籍しており、美術学院（日本の大学の美術学部に相当）、設計学院（同デザイン学部に相当）、伝播学院（同メディア芸術学部に相当）、表演学院（同音楽・パフォーマンスアート学部に

相当）の4学院で構成されています。今後は同大学との間で学生・教職員・研究者・学術情報資料の相互交流、共同研究を中心とした活動を展開していきます。

Series ● シリーズ 女子美探訪⑥ もう一つの「日常」

卒業生で写真家の迫川尚子さんの撮る女子美のシリーズ第6回です。写真とエッセイをご紹介します。

1日、30分間は半身浴のために時間を割いています。生きていれば、風邪をひいたり、アレルギー症状がでたり、鬱になったり、色々ありますよね。その度に、それ専用のクスリを用意するのは面倒。下半身を温める。下半身より上半身が温かくなれないようにする。それで何があっても、とりあえず何とかかなってしまう、というシンプルな考え方が好きです。

毎日色々なことに振り回されて、なかなか映画を見る余裕がありませんでした。が、とにかく30分時間を作れば、ビデオやDVDを借りて来て、入浴中、少しずつでも見れます。塵もつもれば山ですね。半身浴と映画のセットを始めて今年で3年目、300本以上の作品を見たことになりました。映画の話題にも多少はついていけるようになりました。

それより何より、映画館ですと、ただひたすら暗闇の中で大画面と向き合うことになります。あれこれやりながら、つけっぱなしにできるテレビと違って、私たちを日常から強引に引き離してくれる。迫力では負けるとは言え、湯舟の中の映画も、じたばたする訳にはいかず、画面に集中するしかありません。日常でどんな問題を引きずっていても、30分間はそれを断ち切っ



て、別の時間を過ごすことになります。それが、一つの救いになっていると気づいたのです。

それが例えば、私の表現活動にどう影響するのか？まだわかりません。私の写真のテーマは、あえて言えば「日常」です。小津安二郎の映画も、「日常」がテーマとされています。でも映画は、日常から引き離されたところで見られるものですね。小津さんは、無秩序で混沌とした日常を、四角く切り取られた画面の中に、隅々まで慈しむように整理しなおし、独特の秩序とテンポを生み

出しました。だから小津さんの「日常」を嘘っぽいと非難する人もいます。ただ、嘘っぽいか本当っぽいかということより、小津映画を見てみると、そのもう一つの「日常」にひきつけられながら、映画を作るとは何か、作品を見るときは何か、表現するとは何かという問いにいつも突き当たるのです。

迫川尚子（さこかわ なおこ）【写真家】

女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業
カフェ「ベルク」経営。写真集に「日計り」。

Topics ● 3 公募展受賞者紹介

第6回福知山市佐藤太清賞公募美術展

○絵画の部 特選

西岡悠妃（芸術学部絵画学科日本画専攻2年）

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎月無料で送付しております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課まで連絡ください。
また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
〈広報入試課〉 TEL. 042-778-6123
FAX. 042-778-6692
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 企画部 広報入試課
監修 原田 松野
発行日 2007年4月1日